わが子のあゆみ



垂井町立表佐小学校（たるいちょうりつおさしょうがっこう）

2021.1
No.464
初春号
第72巻2号
1

構成的グループ・エンカウンター

今年度表佐小学校では、様々な活動に「構成的グループ・エンカウンター」を取り入れています。仲間と活動する楽しさ、仲間に自分の思いを伝えたり聞いたりすることの楽しさ、ルールを守って協力し合うことの大切さ、自分の役割を果たすことの充実感を味わうことで、社会で生きていく力の基礎を養います。エクササイズやシェアリング（ふりかえり）を通して、心の交流のあるあたたかい人間関係が作られていきます。



［ときしりつひだしょうがっこう］

土岐市立肥田小学校

肥田

●住　所　〒509-5115
土岐市肥田町肥田2269-1
●TEL　0572-54-5165
●児童数　311名



〈地域の自然や風土〉

土岐市は岐阜県の東南部に位置し、良質な陶磁器用粘土が豊富に採れることから二〇〇年以上の歴史がある美濃焼の産地として発展し、今もその文化を引き継いでいます。土岐市の七割は丘陵地であり、豊かな自然に囲まれています。

明治六年の学制発布により天福寺堂宇を借り、「大鋼義校」として開校し、明治九年に肥田小学校（肥田学校）と称されました。現在地へは、昭和五十二年に移転しました。



校舎



「歯きらりママ」による歯磨き指導
（令和元年度の様子）

学校の教育目標

よく学び　たくましく　心豊かな子

学校のたからもの①
児童の誇り「歯きらり」

肥田小学校は、平成二十七年の全日本学校歯科保健優良校表彰、「文部科学大臣賞」受賞をはじめ、三年連続の岐阜県学校歯科保健優良校「特選校」を受賞するなど、健康な歯を大切にする「歯きらり」に取り組んでいます。毎週火曜日の朝は、「歯きらりタイム」として、全校一斉にフッ化物洗口と口の体操を行います。また、月に一度「歯の日」を設定しています。「歯の日」では、PTA母親委員らによる「歯きらりママ」の協力により歯垢の染め出しを実施し、適切な歯磨きができるよう児童自身が歯磨きの状態を記録・点検する取り組みも行っています。

給食後には歯を健康に保つことを願って本校で作詞・作曲された「ゴーゴーミガクンジャー」の歌が流れ、全校一斉に歯磨きを行っています。「ミガクンジャー」は本校職員の発案によって作成された絵本及びキャラクターであり、子どもたちだけでなく保護者からも愛されています。

今年度は、岐阜県学校歯科保健優良校「歯科保健推進校」の表彰を受けました。これからも本校の「歯きらり」は「歯きらりママ」「ミガクンジャー」とともに児童の誇りであり学校の宝であり続けます。



全国小学生歯磨き大会に参加（5年生）



もくピカ掃除の様子

職員による手作り絵本
「肥田小歯みがき戦隊
ミガクンジャー」





掃除前の
黙想の様子



担任による
読み聞かせ本の紹介



「花さき会」による読み聞かせ（令和元年度の様子）

学校のたからもの②
児童の誇り「もくピカ掃除」

「黙想！」子どもたちの発声の後、校舎内に静寂の時が訪れます。環境を美しく保つ掃除の時間の始まりです。「もくピカ」の「もく」は黙々と磨く姿を示し、「ピカ」はピカピカに磨き上げられた学校を示しています。

「もくピカ掃除」は黙って掃除をするだけではありません。分担場所を美しく磨き上げようとしたか、十五分間やり抜くことができたかを見つめ、真摯に今の自分と向き合う取り組みでもあります。美しく磨き上げよう、やり抜こうとするからこそ、自ずと黙々と掃除に取り組む姿になるのです。

「もくピカ掃除」に取り組むことで、ピカピカになるのは学校だけではありません。使わせていただいている学び舎を美しい環境に保とうとすることで、心が磨かれ行動も表情もピカピカになることを子どもたちは学んでいます。その姿勢は、毎日の学校生活によい影響を与えています。

学校のたからもの③
児童の誇り「豊かな読書」

本校には二つの図書室があります。低学年用図書を配架した「ちびっこランド」と中学年・高学年用図書を配架した「ゆめランド」です。蔵書は一万二千冊を数え、児童全員の読書状況をデータ管理しています。

毎年十月に実施する読書月間では、異なる分類の本を読むことができるよう「分類ビンゴ」に取り組んだり、学級全員で目標冊数の達成ができるように「クラスパズル」に取り組んだりしています。また、朝読書の時間を活用し、職員による読み聞かせや本の紹介もします。

今年度は、実施することができませんでしたが、ボランティア団体「花さき会」の皆様にお願いし、読み聞かせを行っています。こうした取り組みにより、興味・関心の幅を広げ、将来の夢を育む読書を児童は大切にしています。

［かかみがはらしりつなかだいいちしょうがっこう］

各務原市立那加第一小学校

学校の教育目標

「未来を拓く子」
～たくましさ と やさしさ があふれる学校～

●住　所　〒504－0043 各務原市那加手力町22－5
●TEL　058－382－2109
●児童数　786名



〈地域の自然や風土〉

各務原市は、岐阜県の南部に位置し、北は岐阜市、西は岐南町、笠松町、東は関市、坂祝町、南は愛知県に隣接しています。工業都市として発展する一方、伊木山や各務原アルプス等の山々や市の南部を流れる木曽川、にんじん作りが盛んな各務原台地など、豊かな自然にも恵まれています。

那加第一小学校は、各務原市最西端に位置しています。本校は、明治六年に「洗心学校」の名前で創立されて今年で一四七年目を迎え、市内で最も歴史ある学校の一つです。校区には、旗本徳山陣屋公園や柄山古墳、新加納宿、手力雄神社等、多くの史跡が存在し、歴史や文化が豊かな地域です。



校舎



昨年度の「那加一文化の日」
美しい歌声は子どもたちの誇り

学校のたからもの①

子どもたちが引き継ぐ四つの伝統

毎年、「六年生を送る会」では、子どもたちが大切にしてきた「歌声」「あいさつ」「ボランティア」「掃除」を「四つの伝統」として確かめ合い、卒業生から在校生に引き継ぐ場をもちます。その中から二つを紹介します。

⑴美しい歌声

本校の美しい歌声は子どもたちの誇りです。歌声委員会の児童が企画、運営する歌声集会では、発表学年が「今月の歌」を合唱します。練習を重ねて磨いてきた歌声を、拍手や感想発表で認め合い、発表した児童も歌声を聴いた児童も充実感や感動を味わいます。

また、秋に開催する歌声集会「那加一文化の日」では、全校で高めてきた歌声を学年ごとに披露し合います。「那加一文化の日」は、歌声の響きの美しさや迫力、仲間と創りあげる喜びや感動を実感する大切な行事となっています。

⑵心のつながるあいさつ

毎朝校門付近で出迎えるあいさつ生活委員会の子どもたち。今年度は感染予防のため例年のようにハイタッチはできませんが、マスク越しでもわかる笑顔で、登校する仲間とあいさつを交わしています。

また、「コロナ禍だからこそ心のつながる「ありがとう」を大切にしようと六月から始まった「那加一オペレーション」の取り組み。毎週金曜日の給食の時間、放送委員会の児童が「今日は『那加一オペレーション』の日ですね。一週間を振り返り、『ありがとう』と感謝する気持ちや『がんばったね』と認め合う気持ちを拍手で表す時間をもちましょう」と放送で呼び掛けます。週末の帰りの会の時間は、「ありがとう」のあたたかい拍手で教室が包まれています。



「四つの伝統」の一つ「心のつながるあいさつ」



休校中に児童机の天板を
美しく整えてくださった
ボランティアの皆様



Webラーニングの活用で
学びの個別最適化をめざす



PTAのあいさつ運動
地域ぐるみで明るいあいさつを
交わせる子を育てる

昨年度の「生き方を考える会」
夢や希望をもって生きる子を
育てる



学校のたからもの②

特色ある教育活動

⑴Webラーニング活用実践

本校では、県の教科学習Webシステムを利用し、児童の学習データを分析して学習指導に役立てる実証研究に取り組んでいます。とりわけ算数の授業では、一人一台ずつタブレット型パソコンを使って、Webラーニングの問題に挑戦する実践を進めています。「自分に合った問題の実現をめざします。

⑵生き方を考える会

十二月には六年生を対象に「生き方を考える会」を開催します。キャリア教育の一環として、夢や志をもって働く地域の方々を講師に迎え、職業や仕事についての話を聞きます。講師の方に、働くことを通して感じた苦労や喜び、やりがいなどを語っていただくことで、児童は講師の方の生き方にあこがれをもったり、働くことの意味や自分の将来について考えたりします。

「生き方を考える会」は、夢や希望をもち、自らの生き方を考える子どもを育む貴重な学びの機会となっています。

学校のたからもの③

学校を支えてくださる保護者や地域の力

⑴学校支援ボランティア

本校の自慢は、何といっても地域の教育力と人材力にあります。昨年度は、のべ一五〇〇名の地域ボランティアの方々にご来校いただき、本校の教育活動を支えていただきました。今年度は授業や掃除、読書等、直接児童に関わる活動は控えていただいていますが、除草作業や樹木の剪定、畑の世話、棚や踏み台の作製、ペンキ塗り、校外学習の見守り等、児童の安心・安全な学校生活を支えてくださっています。

⑵地域ぐるみのあいさつ運動

登下校時には、地域のボランティアの方々が「見まもり隊」として通学路で毎日子どもたちを見守り、あいさつをしてくださいます。また、毎週月曜日の朝には、ＰＴＡ役員も校門前であいさつをします。

今年度は「那加中校区コミュニティ・スクール」の取り組みでも、「明るいあいさつを交わせる子」を育てる活動に力を入れ、地域ぐるみであいさつ運動を推進しています。

⑶「放課後子ども教室」

「ららら学習室」

二年生の希望する児童が、地域の方々に様々な遊びを教えていただく「放課後子ども教室」。子どもたちは、昔遊びや工作などが体験できるこの教室を毎回心待ちにしています。三年生の希望者が参加するのは、放課後の「ららら学習室」。こちらは、地域の方々が先生として算数を教えてくださいます。

地域の方々に先生になっていただいて学ぶ体験を通して、子どもたちは、人とふれあうことのよさを実感していきます。

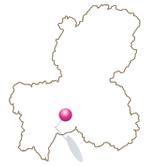


地域の方と遊びを
通してふれあう
「放課後子ども教室」

［ぎふしりつみわみなみしょうがっこう］

岐阜市立三輪南小学校

●住　所　〒501-2577 岐阜市太郎丸1034
●TEL　058-229-1013
●児童数　576名



〈地域の自然や風土〉

三輪南小学校は、岐阜市の北東部に位置し、自然が豊かで古墳群や古い神社・仏閣などが多い歴史ある地域にある学校です。校区には、保育所や幼稚園、小・中・高校、大学まであり、それぞれに連携し、交流が盛んです。地域は、学校に対して協力的で、学校の一番の応援団です。学校目標「めあてをもち 仲間と共に やりぬく心」の具現を目指して、子ども・教職員、地域や保護者が来たくなる学（楽）校づくりに取り組んでいます。



校舎



「もくピカ掃除」
黙って掃除に集中。床をピカピカにします

学校の教育目標

「めあてをもち 仲間と共に やりぬく心」

学校のたからもの① 「自分で・自分たちで」の合言葉

子どもたちは、くらしをよりよくすることで、「みんなが来たくなる学（楽）校」にしようと、いろいろな場面で、考えを出し合い、工夫しています。「自分で・自分たちで」の合言葉を宝物にしています。

・あいさつレンジャー

三輪南小学校の自慢のひとつは「気持ちのよい挨拶」です。子どもたちは、挨拶の大切さについて話し合った上で、習慣化することを目指しています。児童会の生活委員会の子どもたちが、「あいさつレンジャー」となり、毎朝の挨拶を率先して行うと共に、気持ちのよい挨拶をしていた子を見つけては、全校放送で紹介し、「挨拶名人」を増やしています。

・もくピカ掃除

児童会の美化委員の子どもたちの呼びかけのもと、「もくピカ清掃」を全校で実施しています（もくピカ清掃：「もく」…もくもく黙って掃除、「ピカ」…ピカピカになるまで掃除）。また、ピカピカになるまで一生懸命に掃除する姿として「掃除の汗」を価値付けています。



「ふるさと大好き作品展審査」
ふるさとのよさを伝える力作に審査も真剣

学校のたからもの② ふるさと学習

三輪南小学校は「コミュニティ・スクール」です。学校運営協議会と連携し、地域の魅力ある人的・物的資源を生かしながら、「ふるさと学習」を進めています。

・ふるさと大好き作品展

夏休みに、地域の自然・歴史・文化・産業などを対象とした作品の募集を行っています。学校運営協議会委員や地域住民等で構成された審査委員会で入賞作品を選出し、「文化祭」の中で表彰し価値付けています。

今年度は「地域のよいところ新聞」「三輪南の神社めぐり」「三輪南全世帯を大調査!!地域別名字ランキング」などのふるさとの魅力を発見した作品が多く出品されました。

・ふるさと自慢○○名人

三輪南小学校では、すべての学年で「ふるさとを知る・つながる」活動を取り入れています。三年生では、総合的な学習の時間に、「虫取り」や「茶道」、「写真」など地域のいろいろな名人をお呼びして、素敵な生き方に関する話を聞く機会をつくっています。

それ以外にも、地域のみなさんといっしょに計画するワークショップ形式の「みなみっ子祭」や地域と学校が協働して防災や命の大切さを考える「みなみっ子安全サミット」、保護者が生き方を語る「父さん・母さんお仕事授業」などを行っています。

子どもたちは、地域のみなさんと関わりながら、ふるさとを知る・魅力にふれる「ふるさと学習」を通して、ふるさとのよさに気付くよい機会としています。

学校のたからもの③ 地域のサポート力

今回の新型コロナウイルス感染拡大防止に関して、学校運営協議会が中心となり、自治会と共に学校を強力にサポートしていただいています。「朝の検温チェック」や「消毒作業」、そして、「トイレ掃除」など、地域や保護者のボランティアのみなさんのおかげで、教職員は子どもたちと向き合う時間を生み出すことができました。地域のサポートは、子どもたちにもしっかりと伝わり、子どもたちは、自分の思いや感謝の気持ちなどをメッセージカードに言葉やイラスト、吹き出しなどで表現する子がたくさん現れました。



「地域のみなさんと稲刈り」
実った稲穂を安全に刈り取った5年生



「ふるさと自慢の学習」
地域の茶道名人の流れる動きに夢中になった3年生



「地域のみなさんからのコロナ対策かかし」
新型コロナウイルス感染防止の啓発のために、三密・マスク着用などのたすきをかけたかかしを5体設置していただきました



「消毒ボランティア」
ありがとうございました。
地域や保護者のボランティアのみなさんによる毎日の消毒作業

子どもたちから ボランティアのみなさんへのメッセージ

「毎日、消毒作業をしてくださってありがとうございます。ボランティアのみなさんを見ていて、わたしも『いつかボランティアをしたい』という気持ちになりました。安心して生活しています」（六年生）

子どもたちのメッセージを届けることで、地域のボランティアのみなさんから「子どもたちが喜んでくれて取組を続けてきてよかった」「子どもたちの健康で安全な学校生活のための手助けができてよかった」という声が寄せられました。

ボランティアの方から 子どもたちへのメッセージ

「おじさんたちは、みなさんを陰ながら応援しています。元気で、明るく、みんな仲良くして学校生活を楽しんでください。これからもボランティア活動は喜んで行いたいと思います。おじさんもみなさんと同じように三輪南小学校の卒業生です」

地域のみなさんと子どもたちの双方向の関わりがつながりを強めています。地域の温かで強力なサポート力は、三輪南小学校の大きな宝物です。



「ボランティアお礼メッセージ」
子どもたちはボランティアのみなさんに思い思いの形で感謝の思いを伝えました

［おおがきしりつみなみちゅうがっこう］

大垣市立南中学校

●住　所　〒503-0864 大垣市南頬町4-141
●TEL　0584-78-2337
●生徒数　333名



〈地域の自然や風土〉

南中学校のある大垣市は「水の都」とも呼ばれ、古くから城下町として栄えてきました。かの有名な松尾芭蕉「奥の細道」の結びの地としても有名です。校区は落ち着いた住宅街で、生徒たちは地域の方々の温かいまなざしに見守られながら日々勉学に励んでいます。平成二十八年には創立七十周年を迎えました。



校舎



生徒玄関の様子

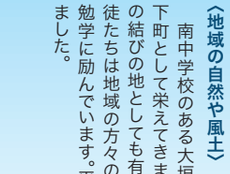
学校の教育目標

真心をもって生きる

学校のたからもの①

生徒会の四本柱

◎心の通う挨拶
◎心に響く合唱
◎心を磨く掃除
◎自ら学び続ける学習



生徒会では、先輩方が築いてくれた「南中四本柱」を今も大切に守り、発展させています。

◎心の通う挨拶

「誰に対しても気持ちのよい挨拶」を心がけています。廊下ですれ違う時や登下校の時など、丁寧にお辞儀をして挨拶をする姿がたくさん見られます。また、生徒会メンバーが、隣接する南小学校、大垣東高等学校と合同で定期的に挨拶運動をする「三校あいさつ活動」を行っています(今年度は未実施)。登校時に道行く児童や地域の方へ気持ちのこもった挨拶をするという活動です。

◎心に響く合唱

本校では、合唱に対する思いは非常に強く、みんなが合唱を大切にしています。毎年秋に行われる「文化の集い」では、各学級が練習を積み重ねた合唱曲を保護者や地域の方に披露し、好評を得ています(今年度は合唱活動が行えないため、実施していません)。

◎心を磨く掃除

膝を床につき、心を込めて雑巾掛けをする通称「シンデレラ拭き」を代々受け継いでいます。古い校舎ですが、心のこもった清掃活動のおかげでいつも美しい自慢の校舎となっています。

◎自ら学び続ける学習

教師側からばかりではなく、生徒会から「授業」への取り組み方について提案があります。「自分の意見を積極的に述べること」「仲間の意見をしっかり聞くこと」を軸として、日々、学習活動に励んでいます。

学校のたからもの②

合唱曲「水の翼」

創立五十周年を記念して「水の翼」という組曲(一.泉　二.走る川　三.海へ)が作曲されました。創立七十四年目を迎える今でもこの曲は歌い継がれています。また、二番の「走る川」は、南中学校だけではなく、全国へと広まり、いろいろな学校で合唱コンクールの定番曲として歌われ、多くの人々に親しまれています。



生徒会活動の掲示物



小･中･高の絆「三校あいさつ」



令和元年度「文化の集い」オーケストラとともに



黙々と床を磨く姿･
3年生の掃除の様子



PTA･地域の支えで、安心して過ごせる環境が保たれています



文化の集いでは、毎年オーケストラの演奏で一年生が「泉」、二年生が「走る川」、三年生が「海へ」を歌います。文化の集いの前には、縦割り練習を行い、二年生が一年生に「泉」を、三年生が二年生に「海へ」を教える機会を設け、後輩が先輩の演奏を聴いて、あこがれをもって歌えるようにすることを大切にしています。私たちは、校歌と同様、南中の伝統あるこの曲に誇りをもって歌い継いでいきます。

学校のたからもの③

保護者、地域の支え

南中学校の生徒は、保護者、地域の多くの方々に見守られ、支えられながら学校生活を送っています。PTAでは、「共に学び、共に歩む」を活動スローガンとして、常に学校のため、子どもたちのためになる活動を仕組んでいただいています。毎年夏休みには、二学期を気持ちよく迎えるために、敷地内の除草作業を行う「ボランティア清掃」を行っています。今年度もコロナ対策を十分にしたうえで、多くの保護者の方に活動をしていただきました。また、昨年度には、生徒がこれからの時代をたくましく生きぬくための一助となるよう、三回の「キャリア教育講演会」を実施しました。

地域の方には登下校の「見守り隊」、校舎内の消毒の「スクールサポートスタッフ」等で毎日お世話になっています。保護者、地域の方々の支えがあってこそ、安心･安全な学校生活を今日も送ることができています。

郡上市立北濃小学校 PTA会長　三島 栄志

わが家の宝物

わが家の宝物は二匹の飼い猫です。

一匹は三毛猫で、名前はミーコと言います。年齢は十四歳で、元々はわが家の庭に棲みついた野良猫でした。ミーコは人懐っこい性格で、現在小学六年と小学四年の長女と次女が幼少の頃から遊び相手になってくれました。三年程前からミーコを家の中で飼うことになり、愛らしい姿に癒される日々でしたが、その約一年後、子どもたちがサバトラ柄の子猫を拾ってきたため、家族がもう一匹増えることになりました。子猫のルミはすくすくと成長し、今ではミーコに頻繁に手を出しては威嚇されていますが、ミーコがルミの毛繕いをしてあげることもあり、それなりに仲良くやっています。

わが家に猫たちが居てくれることによって、子どもたちも動物好きになり、日常生活でも優しい心を持つことができるようになったと感じています。また、自由で純粋な猫たちの姿は、四世代同居のわが家にとっての癒しの存在であり、家族のアイドルとしていつまでも元気でいてほしいです。





リレーエッセイ 12

学びのこれから

大垣市立南中学校
田中 禎一



今年は、皆様もご記憶のとおりコロナ禍において学校が閉鎖となり、オンライン学習の考え方が加速しました。対面で行う授業という形式とは違う学びへの可能性に踏み出しました。しかし、学校の価値は、授業だけではないことも、同時に感じた子どもも多いのではないかと思いました。

大人の世界でも、会社に行かずに働くテレワークが加速し、兼業や副業などの働き方改革がすすみ始めました。

「主体的・対話的で深い学び」や「探求学習」といった学習の変化は、オンラインによって、より加速するようにも感じました。小・中学校の変化だけでなく、高校、大学、そして会社全体の変化を感じつつ、これからの学びがどうなるのか、改めて考える時間となりました。

そして「学びのこれから」を考えたとき、学校の在り方や親、教師などの大人の役割は、今までより大きく変える必要があると感じました。

私たち大人は、自身が学校での学びを卒業すると学ぶことが終わったのだと錯覚し、大人から子どもへの一方的な情報の伝達が教育だと勘違いしてしまっているように感じます。

これまでの学校や教育に対し批判的に言いたいわけではありませんが、現在の延長ですすむことには、もっと大きく声を出すべきではないかと感じています。

「いつか、Youtuber」ではなく、すでに動き出している子がいます。また、PTAという組織や活動に批判的な保護者もいます。子どもたちにだけ変化を求めるのではなく、親自らも変化していく必要があると感じています。

「学びとはこうあるべきだ」という主張のし合いでは空しいだけです。親も教師も地域の人も、そして子どもたちも関わる中で、学びについて考えていきたいと思っています。

そして、できればPTAという組織が、その受け皿となれればと期待しています。

次号は安八町立登龍中学校　馬渕 佑司さんです。よろしくお願いいたします。

次回は…　安八町立登龍中学校　馬渕 佑司さん

もくじ

1 表紙　垂井町立表佐小学校
1 学校のたからもの　土岐市立肥田小学校／各務原市立那加第一小学校／岐阜市立三輪南小学校／大垣市立南中学校
9 わが家の宝物　三島 栄志
10 リレーエッセイ⑫　田中 禎一
11 特集
11 3・11を学びに変える【前編】
11 Smart Supply Vision／小さな命の意味を考える会　佐藤 敏郎
17 みんなで家庭教育！①・②　岐阜県環境生活部環境生活政策課「多様性尊重の教育⑰」
19 みんな、いっしょに　安田 和夫
21 保健室ノート　松尾 真寿美
23 私の先生㊷　浅井 祐香
25 子育て半生記　古田 浩之
27 楽しい読み聞かせ⑪　下呂市立尾崎小学校ＰＴＡ
29 親の背中⑥　若山 陽子・國枝 利博
31 私が出会った1冊の本【続47】　古田 雅俊・園部 京子
33 話そう！語ろう！わが家の約束　神成 恵子・安福 貴幸
34 親子ではてな　子の思い　今野 亮汰・安部 雄太・山本 真椰
35 親の願い　遠山 久美・池田 誉
35 教育の窓　横田 由美・宮崎 友秀
41 先生！ありがとう！　保護者から先生へ贈る感謝の四〇〇字メッセージ　関谷 寛
42 お試しクッキング　岐阜県学校栄養士会
43 ふるさとの伝承　各務原市立尾崎小学校
45 きらり！キッズ！　山県市立美山小学校
47 夢中！熱中！我らが部活　大垣市立西中学校
49 私たちのＰＴＡ　関市立板取川中学校ＰＴＡ

機関誌「わが子のあゆみ」
令和2年度　初春号
第72巻2号　通巻464号

発行／令和3年1月1日　岐阜県PTA連合会
〒500-8816　岐阜市菅原町3-3
岐阜県校長会館内
電話／058(262)3257
FAX／058(262)3259
Eメール／info@gifu-pta.jp
ホームページ／https://gifu-pta.jp
編集／岐阜県PTA連合会広報委員会
「わが子のあゆみ」編集部
印刷／サンメッセ株式会社

3・11を学びに変える

［前編］



Smart Supply Vision／小さな命の意味を考える会

佐藤 敏郎

東日本大震災当時は、宮城県女川第一中学校（現在の女川中学校）に勤務。震災後の2011年5月、生徒たちの想いを五七五に込める俳句づくりの授業を行い、2016年度の中学校1年生の教科書にも掲載された。震災で、当時大川小学校6年の次女を亡くす。2013年末に「小さな命の意味を考える会」を立ち上げ、現在は、全国で講演活動を行う。2016年「16歳の語り部」（ポプラ社）を刊行、「平成29年度 児童福祉文化賞推薦作品」を受賞。

復興絵はがき

震災時、牡鹿半島の付け根の港町、女川の中学校に勤務していた。女川では震災後「復興絵はがき」というものができた。

二枚一組で、はがきになった絵は、中学生が描いたものだ。

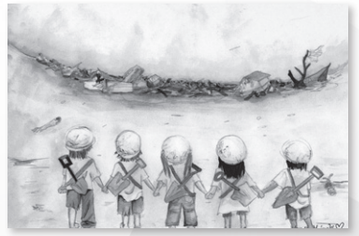
一枚は震災前の美しい海の絵。女川で一番好きな浜の風景を絵にしたのだという。平成二十二年度の海の絵コンクールで入賞し、生徒会文集の表紙にも使われた作品だ。文集が配られた日が三月十一日だった。

もう一枚は別の生徒が震災後間もない頃に描いた絵で、ガレキの山と化した町を子どもたちが見ているという構図だ。ちぎれた手や、血だらけの人らしきものも転がっている。子どもたちは後ろ姿なので、泣いているのか、歯を食いしばっているのか、目をつぶっているのか分からない。人は誰でも見たくないものがある。認めたくない結果、やりたくない仕事、会いたくない人、テスト、宿題…、あの時は見たくないものが見えていた。眠れずに何度か外に出た。家がほとんど流された上、停電のため町が真っ暗だったからか、星がいつもより多く感じた。

翌朝、見下ろした町の光景を表す言葉は今も見つからない。大津波は学校のすぐ下まで到達していた。

卒業式前日、食事中、入浴中…、それは人間の都合。災害は何気ない日常を襲う。そして、大災害は日常を奪う。割れたガラスを入れ替えてハイ元通り、ではない。もう二度と見られない風景、住めない家、会えない人…、それが「大災害だ。いつもそばにあると思っていたものが、なくなってしまい戻らない。目にしたもの、手に触れたもの、語り合ったこと、あの時が最後だったのだと、失ってから気づく。





あの日

あの日は卒業式前日で、三年生を一足先に下校させた後だった。一、二年生は式の準備で体育館や校舎内に散らばって活動中、私は職員室でプログラムの準備をしていた。

地鳴りの後、強い揺れ。二日前も震度五の地震があったので「またか」という感じだったが、どんどん揺れは強くなり、棚から本が崩れてきた。バチバチと火花が散って、停電になった。避難訓練では「地震が発生しました。担任の先生の指示に従って…」なんてやっていたが、校内放送は使えなかった。

地震は担任の授業中に起きるとは限らないし、避難が必要な地震であれば停電するのは当たり前だ。また、校舎を出たら体育館の脇を通って校庭に集まることになっていたのだが、体育館の割れたガラスが落ちてきて通れなかった。みんな容易に予想できたはずなのに。中学の時に体験した宮城県沖地震は放課後の部活動中。校庭、体育館、柔道場、教室…、生徒はいろんな場所にいて、どこに逃げたらいいか混乱した。あの時も「避難訓練とは違うよな」などと話した記憶がある。「喉元過ぎれば」と言われるが、人間とはどうしていつもこうなんだろう。

拡声器を持って外に出た。校庭には行けなかったので、中庭の池の周りに集合した。「大津波が来るぞ」と誰かが叫んだ。女川一中は高台にあり、町の避難場所にも指定されていたので、町民も次々に避難してきた。間もなく、聞いたこともない轟音。木々の間から下を見ると、すごい勢いで車や家が流されていた。プラスチックや紙で作ったミニチュアみたいだった。学校の場所は海抜二十mはある。私は「ここで大丈夫ですよね」と、努めて自分を落ち着かせながら言った。町役場の人は「いや（より高い）浄水場の方がいい」と言った。校長に知らせると、すぐに「みんな敏郎先生についていけ！」と叫んだ。

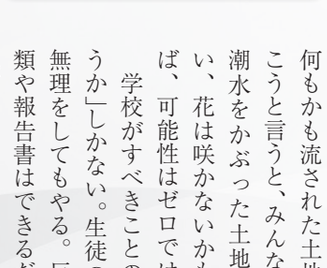
浄水場に向かうとき、五階建ての生涯教育センターのどの位まで水が来ているのか確かめようと、チラッと町を見下ろしてゾッとした。センターは見えなかったのだ。とっさに「（町を見ないように）右を向いて歩け！」と指示した。余計なことを言ったのかもしれない。

しばらく浄水場にいた後、近くの総合体育館に移動し、その夜は柔道場に泊まった。寒かったので、学校のカーテンを外してきた。六、七人ずつが一枚のカーテンでくるまった。体育館には千人以上が避難していたと思う。外では一晩中火が焚かれていて、たくさんの人が囲んでいた。流された上、停電のため町が真っ暗だったからか、星がいつもより多く感じた。

翌朝、見下ろした町の光景を表す言葉は今も見つからない。大津波は学校のすぐ下まで到達していた。

卒業式前日、食事中、入浴中…、それは人間の都合。災害は何気ない日常を襲う。そして、大災害は日常を奪う。割れたガラスを入れ替えてハイ元通り、ではない。もう二度と見られない風景、住めない家、会えない人…、それが「大災害だ。いつもそばにあると思っていたものが、なくなってしまい戻らない。目にしたもの、手に触れたもの、語り合ったこと、あの時が最後だったのだと、失ってから気づく。





ガレキの中の新学期

宮城県では、被災してもしなくても四月二十一日頃に新学期を始めるということだったが、女川は例年通りのスタートとなった。町中が流され、制服もない、鞄もない、道路もない。家や家族を失った生徒も少なくなかった。こんな状態で学校を始められるのだろうか。不安なまま新学期を迎えた。

早い時期の学校再開が正解だったかどうかは分からない。ただ、何もかもなくなった町に、丘の上から子どもたちの元気な声が降り注いだのはたしかだ。それが町民に、私に、どれだけ力を与えたかは計り知れない。学校で子どもが元気に学び遊ぶことは地域のエネルギーだ。災害時に限ったわけではない。

長い春休みの間、いったいどんな新学期が始まるのか想像がつかなかった。教職員は交代で学校に泊まっていたので、夜遅くまでどんな学校づくりをしようか、ローソクを挟んで語り合った。結婚式で使ったメインキャンドルを持ってきた先生がいた。あれは長持ちする（笑）。何もかも流された土地に種を蒔くイメージでいこうと言うと、みんな頷いた。ガレキだらけで、潮水をかぶった土地に芽は出ないかもしれない、花は咲かないかもしれない。でも種を蒔けば、可能性はゼロではない。

学校がすべきことの基準は「生徒のためかどうか」しかない。生徒のために必要なことは少々無理をしてもやる。反対に、こまごまとした書類や報告書はできるだけ省略。焚き火に使って紙がないので、要項などは印刷ではなく校内LANで共有。全体の職員会議をする時間はなく、必要に応じセクションごとにミーティングをした。必要性が叫ばれながらいっこうに進まな

かった学校業務のスリム化が、図らずもあの年は実現した。やればできるのだ。とにかく、学校でスタンダードになっている「例年通り」が通用しなかった。「例年通りやらなくてもよかった」とも言える。

教師は忙しすぎるとずいぶん前から言われていて、様々な対策が施されているはずだが、それによってますます窮屈になったりしている。忙しさの「正体」は何だ？

生徒と席替えや文化祭の出し物について話し合ったり、学級だよりを書いたりするのは、何時間でも苦ではなかった。教師を「授業づくり・学級づくり」にどっぷりと浸らせたら、学校の抱える問題の多くは解決すると思う。本来、教師とはそういう仕事ではないだろうか。

学校には「教育目標」をはじめとして「重点目標」「努力事項」が各教科、領域ごとにいくつもある。その上、文科省や教育委員会からの通達、指針、提言が毎週のように示される。まともに受け取っていたら、何をめざしていいのか分からなくなる。

大切なことが二の次になっていないか、吟味すべきことがおざなりになってはいないか、生徒が見えなくなり、いざというとき手を差し伸べられない状態になっていないか。それで問題が起きたりすれば、その対応に追われる。また通達がくる。マニュアルが増える。悪循環である。ガレキの中で始まった新学期。津波で何もかもなくなってしまった、だから大事なものだけが見えたのかもしれない。

すべては五七五の中に

震災の年の五月に、女川の中学生に俳句を作らせようという企画があった。被災地の学校には、様々なプロジェクトや取材が殺到した。とても対応しきれず、ほとんど断っていたのだが、これはやることになった。「震災と向き合う機会になる」というのが理由である。…で、国語担当でお願いしますと。

ちょっと待ってくださいと、私は言った。八割の建物が流され、十人に一人が犠牲になっている町の生徒に「素直な気持ちを五七五に」なんてことをやらせていいのだろうか。震災のことが題材になるのは目に見えている。何を見ても、どこにいても3・11の記憶がついてくるはずだ。授業の直前まで、いや授業が始まっても迷いは消えなかった。私は半ば開き直って言った。「何を書いてもいいよ。スポーツのことでも、テレビのことでも、サラリーマン川柳でもいい。書きたくない人は書かなくてもいいぞ」あの時の私は、生徒がどんな言葉を選ぶのか怖かったんだなと、最近思う。

一通り手順を説明して「はい、始め」と指示した直後の光景を、私は一生忘れないだろう。生徒たちは、すぐに指折り数えて言葉を探し始めた。もう鉛筆を動かしていた生徒もいた。まるで魔法がかかったようだった。この活動を待っていたのかもしれない。いったいどんなことを書いているんだろうと机を覗くと、こんな句が次々と目に飛び込んできた。





「故郷を 奪わないでと 手を伸ばす」
「ただいまと 聞きたい声が 聞こえない」
「今はなき おばと歩いた 浜の道」
「海水に ついたすずらん 咲いていた」
「ガンバレと ささやく町の 風の声」
「うらんでも うらみきれない 青い海」
「中学校 制服なしの 初登校」
「震災に いつもの幸せ 教えられ」

震災からまだ二カ月、町の至る所に、流された家、自動車、列車や船までが横たわっている。その光景を前に「津波に負けずに頑張ろう」などという言葉は簡単には言えない。原稿用紙を何十枚費やしても表すことはできないだろう。

人は強い衝撃を受けると言葉を失うものだ。悲しすぎても、嬉しすぎてもそうだ。東日本大震災は、まさに言葉を失う衝撃だった。津波が襲う様子も、その後の日々も、言葉にすることができない。言葉にしたくなかったというのが正しいかもしれない。震災二カ月後の俳句の授業は、あの日の風景や想いを、言葉にする作業だ。最初から進んでやったわけではない。ぼんやりと、あるいは仕方なく取り組んだ生徒も多かったはずだ。でも、いざ鉛筆を持って考え始めると夢中になった。授業は「きっかけ」を与えるものだ。きっかけ次第で、作業は捗るし、見えないものが見えてくる。

「窓ぎわで 見えてくるのは 未来の町」
「真っ暗闇 どれだけ明かりを 灯せるか」

窓からは、がれきしか見えないのに、そこに未来の町が見えてくると言うのだ。町が流され、街灯もなく夜は真っ暗なのに、それは始まりだと言うのだ。現実は、薄めたり、紛らせたりするだけでは前に進めない。がれきの山、真っ暗な闇、つらく悲しい現実に向き合ったときに、本当の「希望」や「決意」を語ることができるのだということを、生徒たちが教えてくれた。

「将来は 幼い子どもに 今を伝える」
「町も私も 復興とともに 育ってく」

こんな句も震災二カ月後に生まれていた。あの授業中、彼らの胸をどんな想いが巡ったんだろうと考えると、今も胸が詰まる。

「みあげれば がれきの上に こいのぼり」

こどもの日に、がれきだらけの町をとぼとぼうつむいて歩いていた。下ばかり向いてちゃダメだと、思い立って顔を上げたら、壊れたビルの上に誰かがあげたこいのぼりが泳いでいた。情景が浮かぶ。難しい言葉はいっさい使っていないけれど、津波の破壊力、悲しみ、無力感、そして希望や決意がみんな入っている。

ある生徒は「見たことない 女川町（を）」という五七を書き始めた。残りは五しかない。「悔しいな」「負けないぞ」「立ち向かう」「あきらめる」「涙する」…、いろんな五音の語が思い浮かぶ。彼女は「受け止める」と書いた。「受け入れる」ではない。

「見たことない 女川町を 受け止める」

泣いても笑っても、目をつぶっても現実は変わらない。だから、まず受け止める、それから、泣いてもいいし、休んでもいいし、立ち向かってもいい。そうか、そうだよな、と授業中にこの句を見て気づかされた。

ほとんどが津波についての句だったのにもかかわらず「津波」という言葉を使った作品は意外に少ない。身近な人を亡くしたことを書いた生徒は多かったが、「命」「死」という字は誰も用いず「逢いたい」とか「ありがとう」「青い空」といった言葉を選んでいた。

生徒は、五七五という限られた条件のもとで、必死に言葉を探していた。それは、現実と向き合うことであり、自分と向き合うことだ。探していたのは自分の心だ。現実が厳しければ厳しいほどその作業はごまかしが効かない。似たような形ばかりなのに、なかなかぴたっと合わないジグソーパズルのピースのように、自分の気持ちにぴったりの言葉も、実は一つしかない。書かなくてもいいぞと言ったのに、全員が提出した。

想いの共有

俳句の授業は半年後の十一月にも行われた。震災から八カ月後である。

「目を閉じて 町のサイレン 八回目」

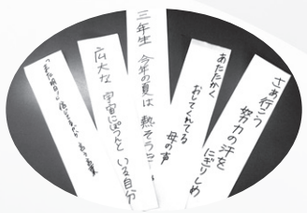
あの年は、毎月十一日十四時四十六分、町にサイレンが響いた。サイレンを聞きながら思い浮かべるのは何だろう。黒い波、復興への決意、誰かの笑顔…。五七五の中には想いがいくらでも入る。

「あの頃は 無理だと思った 文化祭」
「弟と 久しぶりの 大ゲンカ」
「白球を 追ったあの場所 仮設建ち」（野球場は仮設住宅の団地になった）
「和歌山で 見た故郷への 募金箱」

（和歌山での交流事業に参加した生徒の句）

時間の経過により、少しずつ回復した様子や、風景の変化が見て取れる。一方で、喪失感、無力感が改めてうかがえる句もある。

「あの人が 帰ってきてた 夢をみた」
「聞いちゃった 育った家を こわす日を」
「震災で 約束守れず 今悲し」
「コンビニの 窓に汚い 水のあと」



翌年も、その翌年も、現在でも女川中学校では年二回、全校で句会を行っている。

二〇一一年五月に「春風が 背中を押して 吹いてゆく」と書いた生徒がいた。何かに背中を押されていないと進めなかったという句だ。そ

の生徒は半年後「女川の 止まってた 時間動き出す」と書き、そして、次の年の五月「あったかい音のする支援のフルート」と書いた。

二〇一三年十一月、「家がない やっとわかったそのつらさ」という句があった。この生徒は二〇一一年五月には、震災に対する怒りの句を書いていた。二年八カ月が過ぎて、家を失った実感が湧いてきたのである。新しく買い替えたり、作り直したりすればするほど、絶対に元に戻らないものがあることを思い知る。思い出の詰まった家、大切に使っていたグローブ…、命もそうだ。

最近は、だいぶサラリーマン川柳的な句も増えたそうだ。その中に混じって震災のことを詠む生徒もいると聞いた。自然な形だと思う。

後日、卒業生にあの授業のことを聞く機会があった。俳句は短いので掲示物やプリントで何十人、何百人の句が共有できるということ。それを見て「あ、わたしだけじゃないんだな」「同じ気持ちの人がここにも、ここにもいる」と思えたし、逆に「ああこんな考えの人もいる」「こう考えてもいいよね」と違いを認め合うことができたんだと語った。

「思いを言葉にしてもいい」「孤立しない」「違いを認め合う」これは防災も津波も関係ない。今、全国の教室で、いや、世の中全体で必要なことだ。そうすると人は次へ向かう。

彼らは、自分以外の作品をよく覚えていた。中には自分が作ったのは忘れたけど…、という生徒もいた。

五月末に、例年より一カ月遅れのPTA総会が行われ、総会資料の裏表紙に、生徒の句を掲載した。涙しながらそれを読んでいる保護者の姿を見て、中学生の言葉はきっと町を動かすに違いないと確信した。

二十三年度の生徒総会では予算の承認などではなく「女川のために中学生は何ができるか」という全校討論会を行ったし、文化祭のテーマは「おらだづ（俺たち）の底力、希望の光となれ」になった。故郷への愛と、復興への決意に溢れた言葉が次々生まれた。

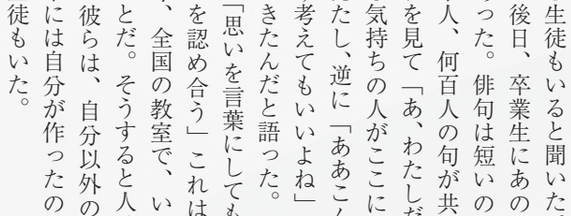
女川の生徒は、津波のことをどんどん話し始めた。特に積極的だったのは一年生。社会の授業で話し合った津波対策案を町長に提案するほどだった。一年生の地理は「身近な地域」の学習から始まるので、当然と言えば当然だ。身近な地域、つまり女川についての学習は「津波」を抜きには できない。

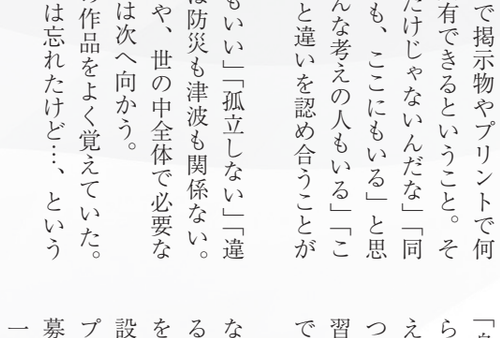
彼らが取り組んだ様々な活動の中に、津波が来るから逃げろという石碑を町内二十一カ所の浜に設置する「いのちの石碑プロジェクト」がある。募金活動をし、半年で一千万円が集まった。今、女川には場所が決まった所から次々に石碑が建っていて（現在十七基）、その度に当時の中学生が集まり、除幕式を行っている。

家が流されたり、身内を亡くしたりした生徒もいて、大丈夫なのかという声もなかったわけではない。「つらくないの？」と聞くと「つらいです」と答えが返ってきた。でも、その後に言葉が続く「つらいからやるんです」。あの悲しみを繰り返してはいけない。好きで体験したわけではないけれど、体験したからこそ、その想いは真に迫った言葉になる。「やらないでいる方がつらい」と語る生徒もいた。

国語の授業もそうだ。「国破れて山河在り」は、まさにあの時の女川の風景そのものだし、平泉で夏草を眺めながら「時が移るまで」涙を流し続けた芭蕉や、愛妻智恵子を看取った光太郎の心情も、自分と重ね合わせて、より深く読み味わうことになる。

魯迅の小説「故郷」にも変わり果てた故郷の情景が描かれている。「故郷」のラストは主人公が「希望」について考える場面だ。





読後に「希望について」というお題で作文を書かせた。ある生徒が「絶望がなくては希望も誕生しない」と書いていた。なんて強い言葉だろう。

未来へ向かう指針

女川の中学生は「3・11は足かせにならなかった。生きる指針になった」と語った。そして、その言葉は私の指針になった。東日本大震災は今でも、きっとこれからも肯定はできない。起きない方が絶対によかった。肯定はできないけど「きっかけ」にはできる、しなければならない。よりよい未来をここから創るのだ。あれだけのことが起きて、進歩しないでいるのはおかしい。

「夢だけは壊せなかった大震災」

みんなの標語みたいになった句だ。あの状況でよく書いたとつくづく思う。この句は「岩石学者になる」という将来の夢と一緒に新聞に掲載されたのだが、全国からたくさん岩石が届いたそうだ（笑）。彼は今、大学で岩石の研究をしている。震災で壊れなかった夢は今も続いている。

あの年の新学期、一人の小学生が「女川は流されたのではない 新しい女川に生まれ変わるんだ」で始まる詩を作った。その一節を書いた大きな横断幕は今も高台に掲げられ、復興に向かう町の合言葉になっている。少年は昨年、女川町の職員となった。

平成二十六年に転勤した東松島市で出会った生徒もそうだった。小学生の時の震災体験を語るまでに様々な出会いや出来事を経て、高校生になって語り部となった。その生徒たちが書いた「16歳の語り部」（ポプラ社）という本がある。16歳の瑞々しい言葉が詰まっている本だ。ぜひ多くの方に読んでいただきたい。



現在私は、女川や東松島だけではなく、震災伝承活動をしている若者たちと一緒に活動する機会が多いのだが、どの若者も「言葉にすることの効果」を口にする。言葉にすると整理できるとよく言われる。震災体験は、あの日背負ってしまった重い荷物のようなものだ。望んで背負った人はいない。鞄の中身がなんだか分からないでいるよりは、分かった方が歩きがいがある。重荷の中を整理して、不要なものを取り出すことができるかもしれない。そしたら、足取りも少し軽やかになるかもしれない。

「あの体験は黙っていれば、ただの嫌な思い出だけど、言葉にすることで価値ある情報に変わるんです」と彼らは言う。聞いてくれた誰かが、何かに気づいてくれるかもしれない。もしかしたら、失わなくて済む命を救うかもしれない。

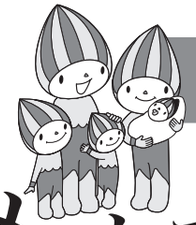
防災はあの日を語ること。あの日を忘れなければ人は逃げるし、備える。ただし、あの日はすごくつらかった日だ。寒かったし、怖かったし、食べられなかったし、たくさん人が亡くなって、みんな泣いていた日だ。語るのは容易くない。でも、彼らと話していると、いつの間にか「未来」の話になる。希望を語り出す。必ずそうだ。体験を語り継ぐ「語り部」的な活動にとどまらず、子どもたちに伝えようとゲームや紙芝居を使ったり、絵画や映像制作に取り組んだり、大学での研究に取り入れたり、あの日の体験を柔軟に変換し、アップデートしている。大人の私たちもそうありたい。

三月十一、十二日は生徒と一緒に女川に泊まっていて帰らなかった。十三日の午後、妻と高校生の息子が会いに来た。女川は道路がなくなっていたので途中で車を置いてガレキの中を何キロも歩いて会いに来てくれたのだ。「奥さんが来ましたよ」と言われ、玄関に向かった。佐藤家で一番つらい思いをしているのは、女川にいる自分だと思っていたので「お母さん、俺は大丈夫だよ。来なくたっていいのに」と笑って駆け寄った。

妻は私を見つけるなり「みずほの遺体があがったの」と言った。娘の名前の後に「遺体」「あがる」という言葉が続くなんてまったく想像していなかった。何を言われたのか分からない。涙も出なかった。妻は逆で、その一言を言うとその場に泣き崩れた。

〈次号に続く〉

家庭で子どもに教えたいことや、育みたい力など、
家庭教育のヒントになる情報をお伝えします！！



みんなで家庭教育！

子どもの心と体の健康
～生活リズムの大切さ～

一 子どもの抱える問題

家庭は、一日頑張った家族が心を癒し、明日へのエネルギーを蓄える場です。「ただいまー、お腹すいたー」と元気に家に帰ってきた子どもは、家庭での食事や睡眠等を通して、生きるための生活の基礎と、生きる力を身に付けていきます。

ところが日中、体を動かさずに室内でゲームばかりしていたり、夜遅くまでスマートフォンを使用したりしていると、夜なかなか眠くならず、寝る時間が遅くなります。すると、朝起きられず、朝ごはんが食べられなくなり、学校で元気が出ません。

このように、子どもたちの生活リズムの乱れは、子どもの心と体の健康を蝕んでいきます。



二「早寝」の大切さ

子どものために、生活環境を整え、子どもの生活リズムを作ることはとても大切なことです。「早寝・早起き・朝ごはん」の生活リズムができた子どもは、登校後の生活の中で、情緒の安定と対人関係の充実をより一層図っていくことができます。



生活リズムを作るためには、まず「早寝」ができるようにすることから始めます。そのために、晩ごはんは七時までに食べ終わり、お風呂は寝る直前にならないようにします。テレビやゲームは消して、強い光を浴びないようにし、暗めの部屋でゆっくり過ごします。睡眠時間は、六歳～十三歳は九時間～十一時間。十四歳～十七歳は八時間～十時間が目安です。その時～七時に起きます。朝起きたら、カーテンを開けて太陽の光を浴びると、眠くなるホルモン「メラトニン」の分泌がストップし、心のバランスを整えるホルモン「セロトニン」が活性化すると言われています。

「早寝」は、子どもの大切な睡眠時間の確保になります。親は子どもが寝た後に、リフレッシュする時間ができます。親にとっても、ちょっとしたゆとりが明日へのエネルギーになります。

三「朝ごはん」の大切さ

朝ごはんは、一日のエネルギーの補給です。学校で集中力を発揮するためには、朝ごはんを食べてエネルギーを蓄えなければなりません。

また朝ごはんは、体内時計を整える働きをします。朝ごはんを食べることで体内時計がリセットされ、一日の生活リズムがスタートします。よく噛んで食べることで、セロトニンの分泌が促され、穏やかな心で、落ち着いて学習に向かうことができます。





朝ごはんは体温を上昇させ、身体や脳を活動的にさせる働きもあります。食べることで腸が刺激され、排便のリズムもつきます。

忙しい朝です。朝ごはんの大切さは分かっていても、なかなか準備できないこともあります。そんな時は、バナナ・チーズ・総菜パンなど、そのままさっと食べられるものでも大丈夫です。朝食をとって、親も子もさわやかな気分で家を出発しましょう。

四 あいさつで生活リズム作り

あいさつは、親子の絆を深めるための大切なコミュニケーションです。そして、一日の生活リズムを作る大切な役目もしています。

朝起きた時の「おはよう」は「元気に起きてきてくれてうれしいな。よい一日にしようね」という今日のスタートの言葉です。学校へ行く時の「いってらっしゃい」は「外で無事に過ごし、元気に帰ってきますように」という無事を祈るおまじないの言葉です。帰ってきた時の「おかえり」は「いろいろなことがあったね。よくがんばってきたね。ゆっくり心と体を休めてね」という温かく迎える言葉です。寝る時の「おやすみ」は「一日元気によくがんばったね。明日もよい一日にしようね。ゆっくり休んでね」という明日のエネルギーにつながる言葉です。

まず、この四つのあいさつを大切にして、生活リズムを作っていきましょう。

五 おわりに

生活リズムは、すぐには身に付きません。せっかく定着してきても、また崩れてしまうことがあります。まず、できることから一つずつ、できなくても、また繰り返して取り組んでみましょう。

子育ては、いくらでもやり直しができるのですから。

恵那県事務所 家庭教育推進専門職
奥村 多美子

「金銭教育」で教えること
～お金の話だけじゃなくて…～

一 はじめに

可愛らしい毛糸の編み物がかぶせてある大きな瓶。ずっしり重い。首のところの結びを解き、中を見てみると、小銭がいっぱい。私の亡き母がコツコツ貯めたものです。今年の春、私はこの貯金の存在に初めて気が付き、その意味を考えることができました。



四月当初、児童福祉施設の方から、施設に通う児童の保護者を対象に「金銭教育」についての家庭教育学級を開催していただけないかと依頼を受けました。五月から始まった学級は、その後六月、八月、十月と続き、施設の方々も巻き込んで、今やシリーズ化した楽しい家庭教育学級となっています。

二 小銭貯金を始めよう！（五月）

お金との付き合いは一生の問題です。「物やお金を大切にする心を育みたい」「将来、お金と上手に付き合える力を身に付けてほしい」――多くの保護者のわが子に対する願いです。親として、わが子にお金の遣い方を教えていくために、まず親自身が「無駄遣いをしない」「計画的に貯金する」ことを目的とした研修を進めることとしました。そして「身近にある小銭を活用して、とりあえず一カ月間貯金をしましょう！」という提案を投げかけたのです。もちろん、私自身も始めました！

三 結構、楽しくなりました！（六月）

「前回お話を聞いてすぐに貯金箱を買いに行ったんです」と言って、赤い郵便ポストの形をした貯金箱を大切そうに抱えた参加者の姿がありました。家庭教育学級に参加されるどの方も、達成感がある表情をされています。施設の方々も一緒に取り組みを始め「私は家族旅行するために始めました」「私は毎週金曜日に財布の中の小銭を貯金することにしました」等々、貯金する目的や方法を発表しました。

小銭貯金の願いや方法に個々のスタイルがあって面白い！ある参加者の方は「金銭教育――お金の話だけれども、それだけではありません。何かのきっかけになったり、できたという自信につながったりします」と話されました。

四 夢を描く生き方が大切！（八月）

小銭貯金を始めて三カ月。参加者のみなさんが「大切なのは貯金する金額ではなくて、例え小さなお金であってもコツコツ貯めるという行為そのものにあること」に気付いていきます。目標（めあて）に向かってコツコツと小銭を貯めるという行為は、まるで自分の気持ちを貯金しているようです。それは、日々の前向きな生き方のための貯金であったり、どんな家族になりたいのか、どんな子育てをしたいのかを考えるきっかけであったりします。そして、小さなお金を大切にしている親の姿は、わが子にも必ず届いているはずです。小銭貯金は気持ち貯金です。親の前向きな生き方は、子どもの心の成長につながります。

五 おわりに

母が貯めていた小銭貯金。どれだけの間、貯金していたのだろうか。どんな気持ちが詰まっているのだろうか。なぜか、瓶の中にある小銭を清算し、使ってしまう気持ちにはなかなかなれません。なぜなのでしょう。母の気持ちを理解もせず、自分勝手に使ってしまうような気がするからでしょうか。小さなお金をおろそかにしないこと、コツコツ粘り強く仕事に打ち込むこと、目標をもって前向きに生きること、何より家族みんなの幸せを願うこと、そんな声が聞こえてくるようです。



飛騨県事務所 家庭教育推進専門職
水口 悟

【多様性尊重の教育⑰】シリーズ

みんな、いっしょに

「ふつう」ってなに②

心の性 からだの性

岐阜聖徳学園大学教育学部特別支援教育専修 教授　安田 和夫

タイの発展と経済格差

初めての海外旅行先だったこともあり、東南アジアの国々は、今でもよく行くことがあります。特に、タイは、特別支援教育の研究のため、近年、よく行く国のひとつです。今から四十年近く前、初めて、タイを訪問した際には、青少年育成団体との意見交換会が主な目的でした。当時の話題のひとつが、貧困がゆえに教育を受けることができない子どもや、売春宿に身売りされる若者の問題でした。町には、日本車があふれかえり、繁華街には、高級デパートが次々と進出し、活気にあふれた魅力的な国タイの「裏側」を関係者から知り、愕然としたことを覚えています。

そして、現在、タイは、東南アジアの雄として、素晴らしい経済発展を遂げて、バンコクを中心に繁栄を誇っています。しかし同時に、タイでは現在、貧富の差が政治問題化しており、状況は緊迫しています。権力や富の集中によりアジア各地で起こっていることを対岸の火事としてみるのではなく、私たちの生活の中にも広がりつつある「息苦しい不自由な社会」「多様性を認めない社会」の延長上にある出来事としてとらえる必要性を感じます。

タイのトイレ事情

さて、そんなタイでトイレを使う機会があります。日本の「これがふつう」という感覚だと、「えっ！なんで」ということも少なくありません。「トイレットペーパーが常置していないところが多い」「トイレが有料で小銭が必要」ということはよく聞く話ですが、排水管が日本などと比べて細く、下水能力にも限りがあるため、すぐに詰まってしまいあふれ出す便器には、気をつけていても「また、やっちゃった！」ということが度々です。プーケット特別支援学校への視察のため、地元のホテルに宿泊した際も、係の人を二度も呼ぶことになりました。

一方、なるほどと思うこともあります。タイの公衆トイレには日本と同様に、入り口に、男性（青色）、女性（赤色）のイラストがあるので、言葉がわからなくても、どちらに進めばよいのかわかるのですが、時々、半分男性（青色）半分女性（赤色）のマークに出会うことがあります。タイでは、こうして、性的指向・性自認の多様性が広く認められていると感じます。日本でも、地域によって、レインボーマークのトイレも見かけるようになりましたが、まだまだ広がっているとまでは言えません。性的指向・性自認の多様性を、学校教育や生涯学習で取り扱われることがまだまだ少ないことも、取り組みの遅れにつながっているように思います。

自己開示から相互理解へ

ただ、この二、三年、私自身は、この性的指向・性自認の問題と向かい合うことが多くなりました。また、大学の中で、教員や学生の間で、この問題について語り合う機会も増えてきました。特に、当事者である学生の意識が高まってきたと感じます。高校時代まで、周囲に自分のことを知ってもらう機会がなかったけれども、大学入学を機にきちんと自分と向き合いたいと積極的に周囲の理解を求める学生がいます。手作りの「自己紹介カード」には、自分の感じ方を目盛りにして紹介しています。「男性的」な部分もあれば、あえていえば「女性と男性の間」という項目もあります。その紹介の仕方は、とても新鮮でした。私たちはともすると、LGBTのどこにあてはまるのかと聞いて納得しようとしたり、マスコミにも出演されているタレントさんのイメージと重ね合わせようとしたりしますが、これそのものが多様性を否定することにつながるかもしれません。その人を丸ごとあるがままに理解しようとすることが大切であり、自分の経験や自分の中にある基準にあてはめて分類する前に、一人の人間として、仲間の一人として、最後まで話を聞いて、何ができるのかみんなで考えていきたいと思います。

親との関係

当事者の学生と個別に相談していると、自分の性的指向・性自認について理解を得る時に一番難しいのは家族だという学生が何人かいます。特に、父親の理解が得られない、話すことができないという学生がいます。

ある学生は、小学生の高学年の頃から「女の子らしくしなさい」と言われたり、「女の子だからスカートで」と決めつけられたりすることに違和感があったそうです。その違和感は年齢が上がるにつれて、自分の恋愛対象が同性であることへの自覚となっていったそうです。

自分の部屋には、常に、あこがれの女性ボーカルグループのポスターが飾られているそうです。父親は、以前「いつまで、こんな女の子のポスターばかり貼っているのだ」と言ってきたこともあり、薄々気がついているだろうと言います。

わが子には「このように育ってほしい」という願いがあるのは、親として当然のことでしょう。そのため、どんなことであれ、その願いから離れていくことは、理解しがたいことなのかもしれません。親にとって、『ふつう』に育ってくれればとの思いや価値観は、時として、子どもを追い込んでいるかもしれません。

以前、私の息子が、仕事のことで、相談してきたことがあります。その際に、自分としては、助言をしたつもりなのに、「おやじは、すぐに『正解』を言う。そんなことぐらいわかっている！」と、捨て台詞を言い残し、部屋を出て行きました。期待があるからこそ、家族だからこそ、いつのまにか、価値観の押しつけをしているのかもしれません。

家族も小さな社会です。一人ひとりに、多様な思いや考え方があって当然なのです。まずは、耳を傾けることの大切さを改めて教えられた気分でした。

心の性 からだの性

今回、このテーマを選ぶのには、いろいろ考えました。これまでにも、何回か書いてはみたものの、ボツにすることが続きました。しかし、多様性尊重を考えるときに、避けては通れないとの思いもありました。そんな私の背中を押してくれたのは、自分のことを積極的にわかってもらおうと行動を起こす学生の姿でした。また、その声を、まっすぐに受け止めようとしてくれる仲間たちの姿でした。もし、今回の内容が、どこかのご家族の話題のひとつになれば幸いです。

心の有り様は、外見では分かりません。だからこそ、心の声に耳を傾けることが大切なのでしょう。

生活の仕方が健康な生活を送ることにつながる

本巣市立土貴野小学校
養護教諭
松尾 真寿美



本校は、昭和五十六年（一九八一年）に現在の場所に移転した築三十九年の学校です。決して新しい校舎ではありませんが、来校された方は「きれいな学校ですね」と言ってくださいます。

土貴野小児童会活動の三本柱は「あいさつ」「そうじ」「なかよし」です。その中の「そうじ」は「音だけそうじ」として行っています。「音だけそうじ」とは、話し声は聞こえなく掃除をする音だけが聞こえる掃除のことです。話をしない（呼びかけや確認も声を出さないようにします）ことで集中して掃除をすることができ、自分たちが使う場所は、自分たちできれいにしようという気持ちで掃除ができています。ただ、児童数が減少している中、掃除時間内で校舎内すべての掃除は難しいものがあります。各学級で分担場所や曜日を決めて掃除を行うなどの工夫をすることで一週間の間にすべての場所が掃除できるよう活動しています。また、各掃除場所に掃除の手順を掲示し、だれもが掃除の仕方を理解し、同じやり方で掃除が進められるように工夫しています。このように掃除のやり方を統一することで、年度が替わってもそのやり方が引き継がれていき、常に清潔な環境が保たれています。

また朝の会では、必ず教室の環境チェックをします。「ごみが落ちていない」「窓を開けて空気の入れ替えをしている」など九項目を調べています。これをチェックすることにより、「快適な環境」とはどのようなことを示すのかが分かります。よって不適な環境になれば、それをすぐに改善しています。例えば、ごみが落ちていればすぐに拾って捨てたり、机やいすも適時直していたりしています。このような児童の活動から「きれいな学校ですね」との言葉が、来校者から聞かれるのだと思います。

今年度の始めは、新型コロナウイルス感染症予防のため休校となり、学校が再開してからも感染症予防のために今までと違う学校生活となりました。「三密を避ける」「こまめな手洗い」など、感染予防策が示されましたが、清潔な環境もその一つです。本校の児童が今まで「当たり前」に行ってきた活動が感染予防につながっています。ことさらに換気を取り上げなくても児童が登校してきたら、係の児童が窓を開けて空気の入れ替えをし、時間毎に窓を全開にします。休み時間に運動場から校舎を見ていると寒くなってきても授業終了のチャイムがなるとどんどん教室の窓が全開になっていきます。掃除のやり方も感染予防のために今までと少し変わりました。同じ手順、同じやり方で掃除を行ってきたのでやり方を変えると混乱するかなと思いましたが、「ぞうきんのやり方を○○のように変える」としたところ、どこが変わるのかを全校児童が同じイメージでとらえることができたので混乱なくスムーズに掃除のやり方の変更ができました。

新型コロナウイルス感染症予防の一斉授業の際「清潔な環境を保つことが感染予防につながっている」という直接的な言葉での指導は行っていませんが、感染予防の具体的な行動を示されたとき児童は、「換気は毎時間しているから大丈夫」と感じたことと思います。全校児童がこのような意識がもてるのも、職員が普段から折に触れ環境衛生の大切さについて話題にし児童の意識にアプローチしているからです。

環境衛生と新型コロナウイルス感染症予防とはすぐには結び付けられないかもしれませんが、関係があるのだということに気付くことが大切だと思います。このように健康な生活を送るためにはいろいろな生活様式が関係しているのだということは保護者の方も理解しています。「分かってはいるけれど…」と感じている保護者にも再確認し、行動してもらえるように通信などで発信しています。



心の成長に寄り添うことができる先生に…

可児市立桜ヶ丘小学校
教諭　浅井 祐香

私がこの掲載のお話をいただいたとき、真っ先に思い浮かんだ顔は、中学二年生の時の担任の先生でした。その先生を一言で表すと、「私たちと同じ目線に立って向き合ってくれる先生」だったと思います。

私にとって、その先生と過ごした中学校生活は、自分と向き合うことができた大切な時間でした。何に対しても全力という言葉が似合う先生。遊びでも授業でも常に本気で取り組んでみえました。休み時間になると、生徒に混ざってドッジボールをする姿は日常茶飯事。大人子ども関係なく、どんなことも一緒になって楽しんでくれる先生に親しみやすさを感じていたのを覚えています。しかし、授業になると一変し、熱意のこもった授業をされてみえました。そのため、みんなが苦手意識をもっていた国語の授業も、なぜかその先生の授業ではどんな学習内容でも引き込まれ、クラス全体で活発に話し合うことができました。引き込まれる授業を作るために、当時先生はどれほどの熱意と時間をかけて授業準備をされてみえたのか…。私たち生徒が分かりやすいようにという願いを込めて準備してくださっていた先生の授業に対する姿勢は、今でも尊敬の気持ちと、私にとっての目標となっています。

そんな先生と、私は一度だけ泣きながら話し、ぶつかり合った時がありました。それは、中学二年生の冬の時のことです。私は三年生を送る会で歌う合唱の総監督を任せてもらうことになりました。しかし、本当のことを言うと、リーダーとしてみんなをまとめたり、決断をしたりすることが大の苦手で、不安しかありませんでした。「本当にこれで良いのかな…」「この方法であっているかな…」そんな自信の無さは、全校の前に立って練習を進めていくときもありありと出てしまい、案の定練習も上手く進めていくことができませんでした。

そんな時、放課後に先生から合唱練習のことについて聞かれ、思わず「私には進行やまとめていくようなリーダーはできない。難しい」という悔しさや苦しさをはきだしてしまいました。すると先生から、

『自分の殻を破れ。怖がるな。自分から変わろうとしなければ、何も変わらないんだぞ』

と叱咤激励を受けました。先生から言われたこの一言で、私は自分の心の弱い部分に気付くことができました。あの時先生が、私の悔しさや苦しさを正面から受け止め、真摯に私の話を聞いてくださったおかげで、「勝手に自分の限界を決めたり殻に閉じこもって怯えたりはせずに、まずは様々なことに挑戦してみよう」「まず自分が相手と向き合って接してみよう」という考えに変わりました。

その後も、いろんな場面で自分の壁を感じることがありましたが、自分自身の殻を破り、様々なことに挑戦することができました。時には厳しく、そしていつも子どもたちの成長を信じて温かく見守り支えてくださった先生のおかげです。そんな情熱をもって接してくださる先生に憧れ、私も教師になりたいと思いました。

大人になった今、同窓会などで担任の先生と当時のことをお話しすると、「ただただお前の成長を信じて、正面から向き合うことを常に大切にしていた」と教えていただきました。子どもたちの成長を信じて正面から向き合い、一人ひとりの言葉や思いを受け止めながら支えてくださった先生の姿を目指して、この先も出会った子どもたちとともに歩んでいきたいと思います。

子育て半生記

変わり者の人生観

中津川市立蛭川中学校 PTA会長　古田 浩之

ぼくは「変わり者」と思われることがよくある。それは、ぼくが人と違うことをよくするからだ。

大学卒業後、念願の教員になったぼくは、日本社会の時代風潮に疑問を感じはじめ、わずか六年で退職。その後は日本各地の田舎へ足を運んだ。学生時代に見聞を広めることに時間を割いてこなかったぼくにとって、そこで見たもの、経験したことはあまりにも衝撃的なものだった。

農業の世界では、農薬まみれの野菜や悪環境の中で育てられる家畜など、私たちが毎日口にするものが、母なる大地からの恵みではなく、工場で生産されているかのようだった。林業を体験すれば、遠くからは緑豊かに見える山々が、実際には手入れされぬまま放置され、山としての機能を果たさない荒廃した植林山がほとんどだということを知った。多くのことを知れば知るほど「結局はお金なのか…」と、自分自身が大人という存在であることを顧みず、ぼくは、大人に対して嫌悪感を抱いていた。そんな中にあって、各地での様々な人との出会いは、ぼくの心を躍らせるものばかりだった。

定年退職後に都会から田舎に移り住み、素人ながら自ら家を建てた夫婦からは、その気になれば何でもできるという心構えを。「医療は農業に、農業は自然に学べ」をモットーにしている医師からは、食と命のつながりや農の大切さを。また、山を愛してやまない林業家からは、山での生き方や自然の奥深さ、さらには人生哲学を学んだ。

まだまだ挙げればきりがないが、中でも特に感銘を受けたのが、山奥で静かに暮らす老人たちとの出会いだった。木を伐り土を耕し、質素倹約に努め、朝晩手を合わせるその生き様は、ぼくの魂に直接呼びかけてくる「何か」を内包していたように思う。

戦後の高度経済成長期から続く市場経済主義で日本は確かに豊かになった。しかし今、そのほころびが見えはじめたことは誰もが否めない事実だろう。物やお金に心を奪われてきたあまりに、とても大切なものを見失ってしまったのではないだろうか。生ぬるい環境の中で生きてきたぼくもその一人だったが、多くの人との出会いや経験が、ぼくの根源的な部分にいのちの水を注いでくれたのだ。それは「生きるために何が大切なのか」、そして「生きる意味」を深く考えさせてくれるものであった。

これらの経験と自らの想いが相まって、ぼくは自給自足をめざす生活をはじめた。それは、自分自身が日々の暮らしを創っていく、その主体的な生き方から得られる充実感。人と自然との関わり、人と人との関わり、人と社会との関わりを見つめ直すことによって得られる未来への希望がそこにあるからだ。

自給自足の生活スタートの地は三重県の山奥。家を建てるため、借りた山の木を伐ることからはじめ、村中から廃材をかき集めた。当時のぼくは犬小屋ひとつ作ったことのないずぶの素人。家づくりのマニュアル本を片手に材を刻み、借りた工具で加工した。六畳二間の小さな家だったが、一人で行った棟上げで、柱などをうまく組めたときの喜びは今でもはっきりと覚えている。

お米や野菜も育てたが、イノシシに荒らされたり、シカやウサギに食べられたりと、なかなかうまくいかないことも多かった。しかし、土に触れることから得られる喜びや安心感は、それらのことを力バーしてあまるほどの大きな収穫となった。

サラリーマンを辞めてから、ぼくはお金を貯めることはできなかったが、その代わりに、様々な経験から得られた生きる術を自分自身の中に溜めることができた。生きていくために必要な多くの作業に取り組み、それらをこなしていくと「人間は本来すばらしい力を秘めているんだな」と、我ながら思う。便利になりすぎた社会では、遺伝子が必要ないものと判断してしまうのだろうか…。

ぼくたちの質素で不便な生活では「考えること」「想像すること」そして「創造すること」がとても大切だ。それらのことをぼくは「生きる力」と表現している。

最後に一言。

自分自身のために、人と違った、自分らしい生き方を、多くの人にしてもらいたいと切に願う。一生一度の人生なのだから。



Illustration&Quiz
イラスト&クイズ



PN. プーさん（下呂市）



PN. アキラ（各務原市）

question 1

出題・木戸 晨大郎（羽島市）
〈答えは34ページ〉

汚れた地図にのっていない方角は？

楽しい読み聞かせ 11

地域の人の思いとつながる読み聞かせ

下呂市立尾崎小学校ＰＴＡ

朝活動の時間にお願いをしているのですが、どちらの読み聞かせの時間も子どもたちが集中して本をじっと見つめながら話を聞いている姿が印象的です。

十月五日、この日は今年度初めての「萩原朗読の会」の方による読み聞かせでした。

低学年の前では、五味太郎著「秋」、きむらゆういち著「いもさいばん」という絵本が読まれました。中学年の前では、ナンシー・ヴァン・ラーン著「わたしをわすれないで」という本が、高学年の前ではマイケル・モーパーゴ著「世界で一番の贈りもの」というお話が読まれました。どれも、発達段階を踏まえ、選んで持ってきてくださったものです。

翌週には、地域の方による読み聞かせが行われましたが、この時も同様に、子どもたちは期待を込めた表情で教室にボランティアの方を迎え、「今日はどんな本を読んでもらえるのだろう」とワクワクしていました。

読み聞かせが始まると、子どもたちの視線は本に集中、しんとなってお話の世界に入り込みます。時には、ドッと笑いが起こったり、「わー！」と歓声が上がったり…。どの教室でも、終わると自然に拍手が湧きます。

終了直後には、感想発表の手がさっと挙がりました。「転校生が他の子を助けたのはやさしいと思った」「転校生が来たら友達になりたい」など、感想を発表します。

読んでくださる方々は、感染予防を心がけつつも、「表情豊かな読み聞かせをしたい」との思いから、顔がかくれないようフェイスシールドや飛沫防止ボードなどを活用しながら、心を込めて読み聞かせてくださいました。

いつも、「今日はどんなお話かな」と楽しみに待っている子どもたち。この日も、読み聞かせて下さる方が、その学年に合わせて自らが選んだ本を用意してくださいました。

記録を確認しながら、これまでに読み聞かせたものと重ならないようにするのはもちろんのこと、「この季節にはこんなお話を聞かせたい」「子どもたちに気づいて欲しいことがある」という、子どもたちへの思いや願いから本を選んでいただいています。

その年の読み聞かせが終了すると、子どもたちは、感謝や読んでもらった本の感想を手紙に綴り、ボランティアの方々のもとへ届けています。読み聞かせて下さる方からは、「日常が戻ってきてくれて嬉しい。読み聞かせも途絶えることなく続けたい」とお言葉をいただきました。

尾崎小学校では、校内の図書館祭りに合わせて、児童による読み聞かせも行っています。コミュニティ・スクールである本校では、こうした地域の方々とのつながりの中で子どもを見守り育てています。

今後もいろんな機会を通じて、子どもたちがたくさんの人や本に触れられるよう、活動を継続していきたいと思っています。







親の背中 ⑥

子どもに恥じない生き方を

瑞穂市立牛牧小学校
ＰＴＡ会長　若山 陽子

『子どもは両親の言う通り行動しないで、する通り行動する』

あるお寺の参道に書かれている言葉の一つです。私はこれを見た時、全くその通りだ！と思いました。

我が家には、中学一年生の長男と小学五年生の次男がいます。私は、子どもたちが小さいころから常に二つのことを口酸っぱく言ってきました。一つは「自分はやりもしないで、人に文句だけ言わないこと」、もう一つは「自分がされたり言われたりして嫌なことは、人にもしないこと」です。これは大人でも同じことで、親もこれができていないと、子どもから「ママ（パパ）だって…」とか「なんで大人はいいの？」と言われ、子どもは理不尽な思いを抱いてしまいます。人に（子どもに）言うからには、まず自分ができていないといけません。

この執筆依頼をいただいた時、自分はどうだったのかを少し振り返ってみました。私は、古い家の一人っ子で、祖母に「お前は跡取りだから…」と幼いころはほとんど祖母に育てられました。今思うと、親の背中というよりも祖母の背中を見ていたのでしょう。昔は何となく聞いていた祖母の言葉も、今になって思い出すことが多々あります。先ほどの二つのことも含め、私が子育ての基本にしていることのほとんどが祖母の言葉によるものだと思います。昔はその言葉の意味をあまり深く理解していなかったように思いますが、自分が親になってみてよくわかったこともあります。おそらく今、私が子どもたちに言っていることのほとんどが祖母の受け売りです。

よく、自分のころはこうだった…というようなことを言う人がいますが、子どもたちは昔のことなんて知りもしないし、そもそも時代が違います。子どもたちが見ているのは「今」です。大切なのは「今」の親の姿で、親は子どもたちの「これから」を考えていかなければなりません。子どもたちのこれからを、幸せで豊かなものにするには、まず自分からです！だから私は、常に子どもに恥じない生き方をしようと心がけています。

今思うと、親の背中は、常に見られていますから…。

父の背中と祖母の言葉

揖斐川町立谷汲中学校
ＰＴＡ会長　國枝 利博

「親の背中」と聞いて真っ先に思い浮かべた言葉は「子は親の背中を見て育つ」である。私は幼少期、家庭環境に恵まれていたわけではなかった。

母とは離別、父は仕事中心の人間で放任主義であったため、普段私の世話をしてくれたのは祖父母だった。祖父母は戦時中を生き抜いた人で、特に祖父は厳しく、私は何か悪さをするたびにゲンコツを食らったものだった。祖母は、病弱で入退院を繰り返し、一日の大半を寝床で生活していた。その祖母がよく言っていた言葉が「生活力のある男になれ」と「カチニ」である。「生活力のある男」とは、文字通り生活ができる力であり、働いて稼ぐことだけでなく、男でも炊事や洗濯ができる人になりなさいと言うことだった。「カチニ」とは、漢字で書くと「徒荷」。意味は人足が歩いて運ぶ荷物のことである。祖母の言葉で言い換えると「人が物を運ぶ時、ついでに何かしらを持って行くことで、手ぶらで行動しないこと。物事の先々を考えて行動し無駄な時間を省きなさい」という意味である。

父とはあまり会話をした記憶がない。仕事一筋の人だった。私は幼い頃、父の仕事場に何度か連れていかれた記憶がある。自分が親になって気付いたのだが、きっと父は言葉数が少ない分、自らが働く姿をわが子に見せ、仕事の大切さを私の記憶に焼き付けてくれていたのだと思う。今、親になってわかるのだが、反抗期や思春期の子に命令口調で言っても反抗されるだけである。私も父にずいぶんと反抗していた。当時の自分は人に言われることがやたらと腹立たしく感じ、思いを聞き入れる事ができなかった。そんな自分だったからこそ、父は私に姿で語っていたのではないだろうか。

今でも私は祖母が幼い私に語り掛けている風景や父が仕事場で働く姿の夢を時々みることがある。人はもしかして言葉の記憶より、風景や情景、出来事など映像としての記憶の方が強く残っているのではないかと思ったりもする。

深夜、この原稿を書きながら卒業をひかえたわが子の背中を見ている。

私は父親のように働く姿を見せているのだろうか。祖母のようにこの子たちに毎日何か話しかけているのだろうか。

私も父に似たのか、あまり話すのは得意ではない。だからこそわが子と過ごす時間を大切にし、私も子どもたちと一緒に親として成長していきたい。



本当の「頭のよさ」ってなんだろう？

勉強と人生に役立つ、一生使えるものの考え方

齋藤 孝 著
誠文堂新光社

瑞浪市立瑞浪小学校 育友会会長
古田 雅俊



大人になった今、子どもの頃もっと勉強しておけば良かったなと後悔することがよくあります。その後悔を、自分の子どもには体験してほしくないといった思いから、「勉強しないかんぞ」とどうしても口うるさくなってしまいます。子どもからすれば、親の価値観を強要されているためいい気分ではないだろうなと思いつつ…。ふと考えたとき、頭がいいとはなんなのか、難しい算数の計算が早くできるといったことや漢字を多く覚えていることなのか？勉強ができることが、果たして頭がいいということなのか？勉強ができるというのは、社会人として必ず必要なものなのかと疑問にも感じるようになっていました。そのような中、本屋でテレビにも多く出演している齋藤 孝先生の本に出会いました。

この本では、感動するといった場面はありませんが、これから生きていくために必要な事柄が述べられていると思います。学生である間は、どうしても頭のよさはテストの結果や成績もしくは偏差値で評価をされてしまいます。しかし、「学生という立場が終わって社会人になると頭のよさを測るものさしが突然変わります。『勉強ができること』から、『社会に適応できること』に切り替わるんです」といった文章に大変共感をしました。私自身も、さまざまな年代の人と関わる仕事をしております。当然、社会人としてやっていくためには、人と話すいわゆるコミュニケーション能力が求められます。また、何か問題が起こったとしても、状況をしっかり分析し、対処方法とそのメリット・デメリットを含め最善の方法を選択し対応する問題解決能力が求められます。学生時代の勉強内容だけではなく、他にも多くの能力が社会人には求められるといえます。この本を読んで、社会人として生きていく上で必要な頭のよさとは、社会にしっかり適応するといったことではないかと再確認できました。

また、この本では「勉強は、自分を今よりもっと生きやすくしてくれる。『知る』『考える』喜びが、人生にワクワクやイキイキを増やすんだ」といった格言があります。今思うと、難しい問題にあたったときに、なんとしてでも解いてやろうといった思いと、解けたときの達成感があったのを思い出しました。その経験の連続が、社会人として難題にぶつかったときの解決策を考えることができる基礎ができたのだと思いました。

勉強は、学生のうちは確かに成績や偏差値も大事かもしれませんが、社会人としての基礎を構築するためにするものだといったことが、わかりやすい言葉で実例を挙げながら説明されています。なぜ勉強しているのか悩んでいるみなさんに、是非読んでもらいたい一冊です。

モモ

ミヒャエル・エンデ 作
大島 かおり 訳
岩波書店

岐阜市本荘中学校 PTA会計
園部 京子



この物語は小さな女の子が「時間泥棒」から人間の大切な時間を取り戻してくれるお話です。

モモは不思議な女の子です。年齢も生い立ちも分からず、一人で廃墟に住んでいます。

モモといると子どもたちは想像力を駆使し、自分たちだけの楽しい遊びを思いつきます。高価なおもちゃなど必要ありません。

大人たちはモモに話をするうちに大切なことに気づき、悩み事を解決していきます。ただ「じっくり相手の話を聞くこと」で、その人に自分自身を取り戻させてくれるのです。

身寄りのないモモのために町の人々は家を用意し、食べ物を持ってきてくれます。モモのところにはいつでもたくさんの友達が…そんな毎日が徐々に変わり始めました。

町の人々は「将来のより良い生活のために」と、日々時間を切り詰めて「時間貯金」をすることで、逆に生活はギスギスしたストレスだらけの毎日に変わっていきます。

ところが、人々が節約した時間は気づかぬうちに時間泥棒に盗まれていたのです。淋しくて暗い毎日。家族や友人と会話を楽しむゆとりさえない世界から人々を救い出してくれるのは、小さな「モモ」です。

世の中の「当たり前」から切り離された存在のモモだからこそ周りに起こる異変に気がついたのかもしれません。

モモは時間を司る「マイスター・ホラ」に助けられ、「時間泥棒」が人間から奪った時間を取り戻してくれます。決して怒ったり、焦ったりせず、着実に時間泥棒を追い詰めていきます。

私は中学三年生の時にこの本を読み、ドキッとしました。受験勉強真っ最中で「時間がない」「ひまがない」と簡単に口に出し、イライラを家族へぶつけ…周りへの感謝を怠っていた自分が恥ずかしくなりました。

そして、「時間」は全ての人に平等に与えられ、それをどう過ごすかは自分次第であることに気がついたのを思い出します。

どれだけ忙しくても決して忘れてはいけないものがあります。

「モモ」は、自分らしく毎日を楽しみ、心のゆとりを持つことの大切さを思い出させてくれるお話です。

何度読んでも、その時の自分の年齢、状況によってまた違った感じ方ができます。親子で楽しめるお勧めの一冊です。

Illustration&Quiz
イラスト&クイズ



PN. りこ（高山市）



PN. 木村 陽平（各務原市）

question❷

出題・平田 直也（岐阜市）
〈答えは34ページ〉

「アイウオ」と言ってみて！
どんな顔になる？

わが家の約束

羽島市立中央小学校 PTA　神成 恵子

神成家の巻

102



わが家には中学一年生の息子と小学五年生の娘がいます。

わが家の約束は、

①ゲームの時間は宿題・明日の準備が終わってからやること。

②ゲームは夜八時三十分まで。

学年が上がるに従って、ゲームの時間が増えてきました。規則正しく生活することや勉強の時間が疎かになってきたと感じ、子どもたちと話し合い、この約束を決めました。それからは、帰宅後、やることをやってからゲームをすることが習慣になったと思います。しかしながら約束を守ろうとしていることはわかるのですが、早く終わらせようとして適当になってしまっていることが、今の課題となっています。

あとは、

③「ありがとう」「ごめんなさい」を言うこと。

当たり前のことですが、なかなか言えない言葉なのかなぁと思います。人として素直にうれしかったら「ありがとう」、自分が悪いと思ったら「ごめんなさい」と大人になっても素直に言える人であってほしいと思います。

約束を守ることが煩わしいと思うこともあると思います。そんな時は家族で「約束を守る」大切さを話し合っていきたいと思います。

話そう！語ろう！わが家の約束

わが家の家訓

養老町立高田中学校 PTA会長　安福 貴幸

安福家の巻

103



わが家は母屋に祖父・祖母と、私たち家族は離れ屋で二十二歳長女、十九歳二女、中学三年生の三女と私たち夫婦と同じ敷地で七人家族です。

わが家の約束＝習慣になっていること、

①あいさつをする。

朝起きておはようと挨拶する。出掛ける時は、「いってきます」必ず母屋の祖父・祖母に挨拶してから出掛ける。帰宅時も同じです。二十二歳の娘も継続しています。機嫌が悪いときも必ず祖父・祖母に挨拶することが約束です。

②頼みごとするときは敬語で頼む。

どんな時でもお願いごとや頼みごとは家族内でも５Ｗ１Ｈを意識して敬語を使うこと。

③家族の誕生日はみんな揃ってからお祝いをする。

年七回行っています。さらにお正月、雛祭り、お墓参り、クリスマス、大晦日まで一緒に過ごし食事すること。家族揃って会食することは、家庭内で役割分担し食事の準備や片付けまで言われなくてもできるようになりました。

④お互いの予定スケジュールを確認する。

家のカレンダーにはそれぞれの予定がすぐに分かるように記載しておくこと。

挨拶から始まり、言葉遣い、会食、予定まで確認し合いながら生まれる「会話」がすべての約束に繋がります。

約束ではありませんが、中学生の三女は、二人の姉がスマホを触っていても、同級生がスマホを持っていても「持たせません！」。

やはり高価なものでもあり、使い方が心配でもあり、希望する高校受験が終わるまで持たせるつもりはありません。でもあとわずかでスマホを持つようになります。姉たちが車を運転すると同じくらい心配が増えます。

心配ごとは絶えないのが家族でもあり、今後も一緒に過ごせる時間を楽しみます。

1月号の

親子で はてな



Q1 凍った道で転ばないようにする歩き方は、何と呼ばれているでしょう?

ア　ウサギ歩き
イ　ペンギン歩き
ウ　ネコ歩き
エ　アヒル歩き





Q2 昔、「お年玉」はお金ではなく、何が配られていたでしょう?

ア　おてだま
イ　みかん
ウ　おもち
エ　だるま



応募方法

応募者は、はがきで、1月末までに下記の宛先へお送りください。
（1人1枚・当日消印有効）
※クイズの答えは1問だけでもOKです。

宛先　〒500−8816
岐阜市菅原町3-3
岐阜県校長会館内
岐阜県PTA事務局
「わが子のあゆみ編集部」

なお、応募はがきには『わが子のあゆみ』への感想・意見やなぞなぞの問題と答え、逆さ言葉などを記入してください。

- ●1月号クイズの答え
- ●郵便番号・住所
  学校・学年・氏名
  保護者名
- ●『わが子のあゆみ』への感想・意見
- ●「なぞなぞ」の問題と答え
- ●逆さ言葉

11月号クイズ答え

Q1　ウ　　Q2　エ

11月号のクイズ当選者

伊藤　慶哉	（岐阜市）	勝　咲来歩	（不破郡）
赤堀　晴輝	（岐阜市）	五十川陽菜	（揖斐郡）
木村めぐみ	（各務原市）	河村　怜奈	（関市）
林　優奈	（各務原市）	玉腰陽直子	（郡上市）
堀　希実	（羽島郡）	伊佐治琉那	（美濃加茂市）
池田　涼菜	（大垣市）	平田　健人	（加茂郡）
名和　氷鏡	（安八郡）		

なぞなぞの答え

①北（きたない）
②笑顔（アイウエオのエがオになっている）

子の思い

楽しかった大根販売

美濃市立中有知小学校
三年　今野 亮汰

十一月、ぼくたち三年生はたくさんの大根をしゅうかくしました。二十一世紀活性化塾のすださんが、「大根の葉の方を持ってぬくんだよ」と言われました。その通りにしたら、大根がおれずに、真っ直ぐすっとぬけました。

そして、学校にもどって、三時間目から四時間目まで、大根あらいをしました。大きなたらいに大根と水を入れ、軍手をはめた手で大根をこすって、土をおとしていきます。ぼくたちの班は「耐病総太り」という大根のたんとうなので、大きくて太い「耐病総太り」をたくさんあらいました。

「これ、すごくきれい」

「この大根、もうちょっときれいにしよう」

と、班の仲間と声をかけあって、大根を洗うのは、とても楽しかったです。その後、ピカピカになった大根が入ったずっしり重いコンテナを運んで、大根をかわかしました。

次の日に、道の駅で大根販売をしました。たくさんの人が、ぼくのレジの前にならんだので、とてもきんちょうしました。でも、たくさんの人に、笑顔で元気に声をかけられたので、とてもやりがいがありました。何より、ぼくたちがしゅうかくし、一生懸命あらった大根が全部売れたことがうれしかったです。

大切な農業

笠松町立松枝小学校
六年　安部 雄太

ぼくは、ひいおじいちゃんの作るお米が大好きでした。とてもおいしいからです。でも、ひいおじいちゃんは、九十四歳になって、米作りをやめてしまいました。暑い日も寒い日も働く米作りは、高齢者にとって大変だからです。ぼくの家の周りでも、どんどん新しい家が建って、田んぼや畑が減っています。

ひいおじいちゃんのことを通して、ぼくは農業には問題点があると思いました。それは、農業をしている人の高齢化で、やめてしまう人が増えていることです。もし、このまま農業をする人が減り続けたとしたら…。ぼくたちは、安心・安全なお米や野菜を食べられないことになってしまいます。農業は、作物を食べる人のためになるとても大切な仕事だということを、もっと多くの人に知ってもらいたいです。

ぼくは、大人になったらひいおじいちゃんに教わって、米作りをしたいです。メダカやカエルのいる田んぼでおいしいお米を作りたいです。

私のお姉ちゃん

美濃加茂市富加町中学校組合立
双葉中学校
一年　山本 真椰

私には、中学三年生の姉がいます。私と姉は他の姉妹がいる人に比べると、とても仲が良いです。でも、少し前までは私たち姉妹もよく喧嘩をしていました。些細なことからすぐ大喧嘩になって、その度に私が泣いていました。私は姉が大嫌いでした。

しかし私が小学四年生のとき、ふと、そういえば最近喧嘩していないなと思いました。気になって、母に聞きました。

「最近、お姉ちゃんと喧嘩していないんだよね」

すると母は、

「お姉ちゃんも大人になったんだね」と言いました。「大人になった」と言われてみると、その頃から姉は変わったような気がします。姉のお菓子が食べたいと私がねだると、一口分けてくれたり、勉強で分からないことがあると、根気よく教えてくれたりしました。

それまでの私は、姉に甘えてワガママばかり言ってきました。それで、姉にも迷惑をかけ、イライラさせてしまっていました。姉が変わったことを実感し、私はなるべく姉のしたいことを邪魔しないようにしました。自分はこれがしたいけど、今じゃなくても良いかな、と考えて我慢しました。そうしたら、些細な喧嘩もなくなりました。楽しい会話がたくさん増えました。今では、姉と話をしているときが一番楽しいです。

姉は今、受験生として勉強を頑張っています。テストはいつも高得点です。バスケも上手く、尊敬しています。姉は私にとってお手本であり、ライバルのような存在でもあります。姉のような人になりたいと思うし、テストの点数は負けたくないとも思います。だから毎日頑張っています。そんな私の頑張りを認めて、応援してくれるお姉ちゃんが、私は大好きです。

いつも本当にありがとう。うるさくて面倒な妹だけれども、これからもよろしく。

親の願い

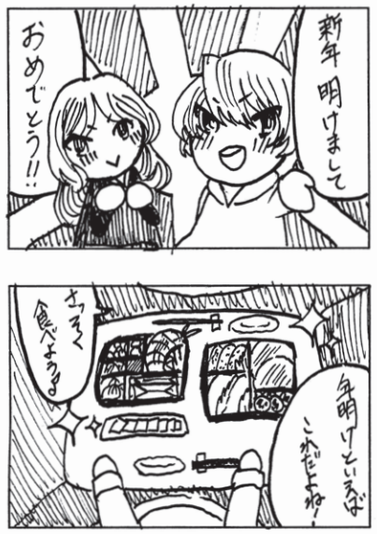
育て！自己肯定感

恵那市立武並小学校
PTA副会長　遠山 久美

「自己肯定感」。私がこの言葉を意識するようになったのは、現在私が働く保育園に勤務するようになってからです。私は小さな保育園の事務員として働いていますが、当時の園長にこの「自己肯定感」という言葉の意味を教えていただきました。その園長は、園児はもちろんのこと、私たち職員一人ひとりをとても大切にし、一人ひとりの存在を認めてくださいました。私は、こんなに自分を認めてもらい、自分はこのままでいいんだと自信をもてる思いになったのは初めてでした。と同時に、自分の子どもたちにこんな思いをさせてあげたいと思うようになりました。

県立大垣桜高校
まんが研究部

正月太り①



逆さ言葉

いかくいにいくかい
（イカ食いに行くかい）

出題・近藤 晃（美濃市）

それから私が子どもに声をかける時に気をつけるようになったのは、まず肯定するということです。どんな会話の中でも、まず子どもが頑張ったこと・やってみたことを認める言葉を使うように心掛けました。子育てをしていると、どうしても「～しなさい！」「～はダメ！」などと、否定的な言葉を使いがちですが、「頑張ったね。でも、次はこうしてみようよ」や、「助かったよ。ありがとう」などの言葉を使いたいと思うようになりました。たったこれだけかもしれませんが、私が園長に言ってもらってきた言葉です。そうすると、気持ちが上がったり、頑張れるようになったりするのです。

今年度は、コロナの影響で、経験したことのない異常事態の連続でした。今を生きる子どもたちはいろんな意味で我慢させられることが多くありました。でも、こんな時だからこそ、あたりまえの日常のありがたみを実感しました。ただ、「できない」ばかりではなく「やれること」を一生懸命やって今を楽しんでほしいと思います。これから先、またどんな時代がやってくるかわかりません。でもそんな時、ピンチの時にこそ、自分に自信をもって前を向いていく、そんな子になってほしいと強く願います。そのためにも、自己肯定感の高い子を育てていきたいと思います。

私は母になって、まだ十四年目です。子育てはいつになっても難しく、日々三人の子どもたちに母として勉強させてもらっています。子どもが大きくなるに連れ、悩みも変わってきて、かわいい・楽しいばかりではいられませんが、これから色々な壁にぶち当たりながら成長していく子どもたちを一番近くで応援し、見守って寄り添えるそんな親でありたいと思います。

子どもたちよ！自分に自信をもって前へ進め！母はずっとずっと応援しているよ。

人生楽しく

高山市立日枝中学校
PTA会長　池田 誉

こんにちは。私は、中学三年と小学五年と年長の三人の息子の父です。私の住んでいる高山市は、自然に囲まれ、生まれた時から住んでいる場所ですが、飽きのこない素敵な場所がたくさんある大好きな町です。

息子は三人ともサッカーをしています。仕事ばかりの私なので、子育ては妻に任せっぱなしですが、息子のサッカーはなるべく見に行くようにしています。

今回は長男のことを話したいと思います。

長男は小学二年から少年団に入団し、八年間サッカーをしています。サッカーでの悩みや練習でのケガなど色々辛いこともありましたが、仲間にも恵まれ、親御さんにも恵まれ、親子ともどもとても楽しい八年間でした。

サッカーが大好きな息子に色々な楽しみを味わわせてもらいました。

最後の高円宮杯では、たくさん笑い・たくさん泣いて本当に幸せな瞬間でした。息子がいたからこそ味わえた喜びだったと思います。しかし子育ては楽しいことばかりではありません。息子が悩んでいたり、悲しんでいる姿を見ることもあり、何が正解かを教えてあげられない場面も多くあります。まだまだ未熟な父親の私なので、何と声をかけていいかわからないこともたくさんあります。

しかし私はすごく楽観的なので『人生楽しく』がモットーです。何か壁にぶつかった時、たくさん悩んで悩んで悩みまくって答えが出なくても、前を向いて進むしかないと思っています。楽しく生きるためには、やはり前を向き笑って進むしかないと思っています。

人生一度きり、楽しく生きてほしいなと思っています。そうなれる人生に導く手伝いを、少し大人になった長男にしていけたらなと思います。

最後に、新型コロナの影響でとても大変な年にＰＴＡ会長をさせていただき、本当に色々な方に助けていただき、今まで以上に人と人との関わりの大切さがわかりました。

教育の窓

変化の中で変わらないこと

岐阜市立華陽小学校
教諭　横田 由美

学校再開後、朝、学校に登校した子どもたちの健康チェックを玄関前で行うことが私の役割となり日課になりました。外で行う健康チェックをしていると、日頃の生活で感じない毎日の自然の変化を感じることができます。コロナ禍の中でも夏には、蝉の声、秋には虫の声が届き、毎日の空気から、季節の移り変わりを感じます。子どもたちは、ランドセルを置くとすぐに運動場に飛び出し、虫を探しています。今も昔もどんな状況にある時代でも、変わらない風景です。子どもたちは、子どもらしく、のびのびと、学んでいます。「虫を捕まえて見てみたい」「この虫、なんでこんな色をしているのかな」いろんな思いから、外に飛び出してきます。仲間に虫のいる場所を教えたり、その虫の生態を説明していたりする子もいます。主体的に動く中で多くのことを学んでいきます。

今までと変わらないことがある一方、今まで通りが通用しない今、大人たちは、子どもたちが安心安全に生活できるよう対策を考えていかなければなりません。これまでと変わらない教育、そしてそこに、ＩＣＴ教育が加わることで学びの本質を問い直し、学びを深めることができるように劇的に進んでいる年となっています。私たち教員もこれまでに積み上げてきたことを大切にしながら、自分自身も学び続けなければならないこと、スキルアップしなくてはいけないことを実感しています。

県立大垣桜高校
まんが研究部

正月太り②　～おもちは罪～



逆さ言葉

てっかどんこんどかって

（鉄火丼こんど買って）

出題・山下 琥太郎（大垣市）

大きな環境の変化がある中で、子どもたちは、iPadでの学習にもすぐに順応しています。主体的に活用し、学ぶことの楽しさを味わうことができると感じます。技術的なスキルは、今後、身に付けていかなければいけない課題となりますが、どんな状況であっても、環境であっても、何を学ぼうとするか、自分から学ぼうとする意欲「知りたい」「なんとかしたい」と思う心の熱量が、人を動かす行動力の源になってくると思います。また、そこで得た知識を仲間に伝え合うことで対話する力もついていきます。

これは、コロナ禍である、なしに関わらず、どの時代でも同じことだと思います。

「やらされた」という気持ちがあると、心のどこかで反発してしまいます。ちょっと嫌でも自分から行ったこと、楽しそうだなと思って自分から動いたこと、自分の意思で動いたことは身に付き、やがては自分の可能性を広げることにつながるのではないでしょうか。

子どもの社会性を育てるために

大垣市立赤坂中学校
教頭　宮崎 友秀

コロナ禍による突然の臨時休校が続き、ようやく六月に学校が再開されるも、この数カ月で学校をはじめ、子どもを取り巻く環境が一変しました。以前のように多くの人の中で当たり前に顔を見ながら対話して学び過ごすことが難しくなっています。これまでも、他人との付き合いを避けたり、人嫌い・人間不信を強めたりする子どもが増えていることなど、現代の子どもたちの現状を危惧する声は多くなっていました。そのような中での今回のコロナ禍は、これまで危惧してきたことにさらに拍車をかけたように感じるのは、私だけではないかと思います。

なぜ、このような現象が顕著になったのかを考えたとき、人として欠かせない条件の一つである「社会性」の乏しさがあるからだと言わざるをえないと思います。

子どもを取り巻く豊かな人間関係がごく自然にあった時代や社会では、ことさら意識する必要はありませんでした。しかし、家族や地域社会との間が疎遠になりがちな現代では、私たちは次代を担う子どもの心の中に「社会性」を伸ばす企てを意図的に行わなければならないのだと思います。その一つが地域社会の積極的な活用です。

私が現在勤務する赤坂中学校は、旧中山道の古い宿場町や岐阜県最大の昼飯大塚古墳を有する歴史と伝統が息づく地域であるため、地域を支える人の繋がりが多くあります。だからこそ、青少年や中学生が地域行事の企画から参加してコロナ禍での参加のあり方を一緒に考えるよい機会だと捉えることができます。青少年や中学生に可能な限り任せるという構えで、企画を提供することがあってもよいのではないかと考えます。

今年度の赤坂中学校では、これまでの体育祭のように応援を行ったり、全校が一堂に会して競技を行ったりする体育祭は中止となりました。しかし、学年ごとに開催する学年スポーツ大会となった中でも、生徒たちは知恵を出し合い大会を盛り上げました。全校を縦割りにした団を決め、団別や学年別に時間をずらして競技練習を行ったり、映像を各学級に配信して団別の取り組みを行ったりするなど、生徒会や団リーダーを中心に団やクラスのまとまりを高めた生徒の発想力は、すばらしいものでした。

こうした力を地域の人たちとの協働体験でも生かすことで、一層社会性の伸長につなげてほしいと願っています。

「保険会社は、
紙をタクく使う仕事だから木を地球に返そう」
と始めた運動でした。だけど

そんな単純な話ではなかった。
インドネシア・パリヤンで知ったことは
「森林は地元の人たちが、生きるために仕方なく
木を切っていたという事実」。
「植林に加え、果樹も育て果実を農民の新しい
収入源にする」というプロジェクトをはじめよう。
人と森・生きものが共に生きる場所を取り戻そう。
「植えた木の本数」「面積」といった数値だけでは
本当の意味で熱帯林は再生しません。
地域の人々と手を取り合って考えた時間が、
明日の地球環境を再生させる。
三井住友海上は、まだまだ勉強中です。

三井住友海上は、
生物多様性の保全活動をすすめています。

立ちどまらない保険。
MS&AD 三井住友海上

40

先生！ありがとう！

～保護者から先生へ贈る感謝の四〇〇字メッセージ～

一年かけて

私の娘は、とにかくよく泣く子で、幼稚園時代、ほとんど毎日登園時に泣いていました。

一年生になっても学校でよく泣いていて、私と妻は、この子はこの先、学校でうまくやっていけるのだろうかという不安が芽生えていました。

そこで、初めての懇談の時に、担任のS先生にこの不安を打ち明けました。S先生はこうお話くださいました。

「大丈夫ですよ。一年生は一年かけて一年生になります。一年生が終わるころには、泣かずに学校に来られる立派な一年生になっていますよ」。

正直、これほど安心し、そして、これほど感心した言葉は思い出せません。最初からできる子なんていないし、他の子と比べることはよくないとわかっているのに。何事も短時間で仕上げることを是としている世界にどっぷりつかっている私の中では、見つからない言葉でした。我が子を「信じて待つ」ことを一緒にしてくれた先生でした。

改めてS先生には厚くお礼を申し上げます。娘はもう高校生になりましたよ。

相変わらず泣き虫ですが。

（関谷 寛・多治見市立陶都中学校 PTA会長）

information

■作品を募集しています。

イラスト・なぞなぞ・逆さ言葉などの作品を募集しています。イラスト・絵手紙はハガキの裏面に描いてお送りください。ペンネームを使う場合にも、郵便番号、住所、学年と氏名を表面に記載してください。なぞなぞ・逆さ言葉は「親子ではてな」の回答とともにお送りください。

宛先はいずれも　〒500−8816 岐阜市菅原町3-3
岐阜県校長会館内「岐阜県PTA連合会・作品係」まで

採用の方にはお礼をさしあげます。

■本誌の購読について

本誌は年間5回発行（7・9・11・1・3月）されます。年度初め（4～5月）と7月の2回、各学校PTAを通じて購読募集を行います（1冊200円、5冊1,000円）が、年度途中でもお求めいただけます。学校または県PTA事務局へお問い合わせください。

■3月号のお知らせ（予告）

特集＝「3.11 を学びに変える（後編）」／表紙＝長良小／学校のたからもの＝佐見小・西小・古川小・稲羽中／わが家の宝物＝小島小／リレーエッセイ／みんなで家庭教育!／みんな、いっしょに／保健室ノート＝笠原中／私の先生＝本田小／子育て半生記＝長森南中／楽しい読み聞かせ＝下多度小／親の背中＝八幡小・中央中／1冊の本＝南帷子小・上矢作中／わが家の約束＝宮小・精華中／子の思い＝西小・付知南小・緑陽中／親の願い＝長森西小・輪之内中／教育の窓＝金竜小・根尾中／先生!ありがとう!＝和知小／お試しクッキング／ふるさとの伝承＝南姫小／きらり!キッズ!＝東第一小／夢中!熱中!我らが部活＝穂積北中／私たちのPTA＝岩手小

お試しクッキング

冬野菜のクリームシチュー

岐阜県学校栄養士会

寒い季節は、体が温まる冬野菜がたっぷりのクリームシチューがおすすめです。

かぶ、白菜、ブロッコリーを入れることで、冬野菜のおいしさが加わり、いつもと違う味わいになります。ビタミンCが多く含まれ、風邪予防に効果的です。和食によく使われるかぶや白菜ですが、このような洋風の料理にもおすすめです。

また、牛乳は成長期の子どもたちに特に必要な、たんぱく質やカルシウムが多く含まれています。冷たい牛乳を飲みにくい冬には、料理に取り入れるとたっぷりとることができます。

市販のルーを使わず、米粉でとろみをつけていて、やさしい味です。とろみ具合は、お好みで調整してください。

材料

（材料4人分）

- 白菜……2枚（160g）
- かぶ……中1個（160g）
- じゃがいも……大1個（160g）
- たまねぎ……中1個（200g）
- にんじん……小1本（120g）
- ブロッコリー……1/4個（80g）
- ホールコーン……30g
- ベーコン……4枚（40g）
- サラダ油……小さじ1
- 牛乳……250ml
- とろけるチーズ……ふたつかみ（10g）
- コンソメ……2個（約5g）
- 塩……小さじ1/2
- こしょう……少々
- 米粉……40g

作り方

1. かぶ、じゃがいもは角切り、たまねぎはうす切り、にんじんはいちょう切り、白菜は2cm幅に切り、軸と葉を分ける。ベーコンは1cm幅に切る。ブロッコリーは小房に分け、ゆでる。
2. 鍋にサラダ油を熱し、ベーコンとたまねぎを炒める。たまねぎがすき通ってきたら、にんじん、じゃがいもを入れ、ひたひたになるまで水を加えて煮る。
3. にんじん、じゃがいもが煮えたら、かぶ、白菜の軸、ホールコーン、コンソメを入れて煮る。具が柔らかくなったらチーズを入れる。
4. 牛乳、分量外の水でといた米粉、白菜の葉を入れ、混ぜながら、とろみがつくまで煮る。塩、こしょうで味を調え、仕上げにゆでたブロッコリーを入れる。



●栄養価（1人あたり）

エネルギー	208kcal
たんぱく質	6.9g
脂質	7.6g
カルシウム	128mg
鉄	0.9mg
亜鉛	1.0mg
ビタミンA	250μgRE
ビタミンB_1	0.20mg
ビタミンB_2	0.20mg
ビタミンC	64mg
食物繊維	4.2g
塩分相当量	1.3g

各務原市立尾崎小学校 ふるさとの伝承

尾崎小学校は、二つの山を切り崩して団地が造成されたことに伴って、昭和五十一年に開校しました。開校当時は山が削り取られ、一面切り開かれたばかりの山石が転がる広々とした中に、鉄筋の校舎がぽつんと建っているだけでした。そこで、この丘を緑いっぱいの場所にしようと、学校もＰＴＡも地域の方も一緒になって力を合わせ、みんなで木を植えたり、道を作ったりしました。現在では、地域の方と教員で、木や草の伐採など手入れをしています。初代の校長先生が作詞された校歌「みどりの丘に」は、「ふるさと尾崎つくろうと 大きく生きるよ 尾崎の子」と締めくくられています。

本校の教育目標のサブテーマは「地域社会の一員として誇りをもって生きる」です。本校では、地域やこの地域にともに暮らす方々のことを知り、地域を担う一員として、自分にも地域にも誇りをもって生き生きと活躍することができるよう、さまざまな活動に取り組んでいます。

地域を学ぶ、地域の方から学ぶ

二年生の生活科の学習では、毎年地域の商店街にあるお店の方々のご協力を得て、「まち探検」に出かけます。普段は聞けないようなことを知ったり、見ることのできないような場所にも案内していただいたりして、地域への興味・関心が高まります。

三年生の総合的な学習は「ふるさと尾崎を知ろう」がテーマです。地域の方を講師にお話を聞いたり、調べ学習をしたりして、昔の尾崎小はどんな様子だったのか、どんな思いで地域の方がまちづくりを進めてこられたのかを知り、これからどんな学校にしたいか、どんなまちにしたいかを考えます。

四年生は、冬になると学校への通学路脇に生えているはっさくの収穫を行います。このはっさくは、開校当時に地域の方が植えた実のなる木の一つです。はっさくは、「感謝の心を伝える会」で地域の方に渡すプレゼントにします。

他にも地域の方には、低学年の希望者を対象とした「放課後子ども教室」で運動や作品づくりの講師や、中学年の希望者を対象とした「ミニ塾」の講師として子どもたちの健やかな成長を支えていただいています。

地域の方とつながる

五年生の総合的な学習は「福祉」です。地域に暮らすみんなの「ふだんのくらしを しあわせに」するためにどうすればよいかを体験を通して学びます。活動の一つに、地域のボランタリーハウス「コスモスの里」のみなさんとの交流があります。年に三回ほど学級ごとに訪問します。最初はどう接してよいか戸惑いを見せる児童もいますが、回数を重ねるごとに親密になり話も弾みます。年末には年賀状を書いて送っています。地域の方の顔と名前を知り、一緒に触れ合うことで自分たちにできることは何があるかを深く考えるようになっていきます。

二月に児童会を中心に行う「感謝の心を伝える会」には、地域の方を中心に本校の教育活動を支えてくださっている方々をお招きして、日頃の感謝の思いを児童が直接伝えています。全校の児童で用意した、メダルやはっさく、感謝の手紙などを一人ひとりに手渡します。また、心を込めて歌のプレゼントもします。改めて多くの方々に支えられていることを児童も実感する場となっています。

今年度は、新型コロナウイルスの影響により、これまで行ってきた活動の中には実施できないものもあります。しかし、できることを工夫して行い、さまざまな活動を通じて、地域に愛着と誇りをもって生きていく子どもたちを育てていきます。



▲コスモスの里の方へ心を込めて年賀状を書く5年生



◀4年生が毎年
はっさくを収穫



▲まち探検でお店の方と



◀校舎



▲感謝の心を伝える会



▲コスモスの里の方とにこやかに交流

地域講師の方と▶
学ぶ3年生





▲朝の登校を見守ってくださる「見まもり隊」

地域社会の一員として誇りをもって



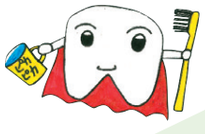
山県市立美山小学校は、山県市立西武芸小学校と山県市立乾小学校の三小学校が平成二十二年に統合し、山県市立美山小学校としてスタートした統合十年目の学校です。山県市の北部にあり、自然豊かな環境に立地する学校です。全校児童一八一名のうち、通学距離等から、児童の約四割がスクールバスで通学しています。

第二次山県市教育振興基本計画「やまがた教育ビジョン2020」のもと、めざす学校として「夢・たくましさがあふれる学校」を掲げ、「進んで学ぶ子」「思いやりのある子」「やりぬく子」をキーワードに教育活動を推進しています。

歯科保健

岐阜県学校歯科保健優良校表彰において、県一位（中規模校の部）を三年連続（平成二十九・三十年度、令和元年度）で受賞しました。山県市子育て支援課や学校歯科医の土田医師、歯科衛生士さんの指導のもと、「歯と口腔の健康」に関する取り組みをしています。また、PTA家庭教育委員会も積極的に関わり、学校と児童と保護者が一体となって、児童だけでなく、その保護者や家庭及び地域の「歯と口腔の健康」の意識も高めています。「歯と口腔の健康」の取り組みをとおして、一生涯にわたる健康づくり、学びを支援する安全・安心・健康な教育環境づくりをめざしています。


学校歯科医の
土田医師による
「歯と口腔の健康」に
ついてのお話を
聞いてから、
歯科検診を受けます。


美山小学校キャラクター
「歯ピカ王子」


新型コロナウイルス感染症対策を講じての
フッ化物洗口を週一回実施しています。

ふるさと美山 ～出会い・ふれ合い活動～

校区の児童・家庭と地域の方々のふれ合いの機会を設定し、地域との絆を深めることをねらいとして実施しました。活動内容は、自分の夢、地域の未来を考えるキャリア教育とし、美山地域の事業所等で活躍している六人の方々を講師としてお招きし、自身の職業や生き方、ふるさと美山に対する思い等について、お話を聞きました。この活動をとおして、山県市への愛着をもち、世界に視野を広げ活躍する人材の育成につながることをめざしています。


「夢は、宇宙における生活環境づくり」
一般建築のみならず、この先の大きな「夢」について
お話を聞きました。


大工道具の一つ「さしがね」に
実際に触れながら、
プロの仕事について考えました。


かんなを使って木材を削る体験を
させていただきました。

進んで学ぶ子


「図画工作」
画用紙いっぱいに
自分の思いを表現します。


美しい教室にひろがる
たくさんのえがお。
仲間が話を聞いてくれるので
安心して発表できます。

思いやりの
ある子



仲間を思いやる「あたたかことば」。
思いやりの木も「あたたかことば」
の葉っぱでいっぱいです。


6年生による「1年生を迎える会」
マットを囲んで、楽しく交流しました。

やりぬく子


美しい心をもつ子どもたちがいる美山小学校は、
学校の顔である下足箱も美しいです。


児童会執行部では、
「自分たちの生活を自分たちの手で」を
合言葉に話し合いを進めます。

男子ソフトテニス部



男子ソフトテニス部では「一所懸命」の部訓のもと、部員全員が一つ一つの練習を懸命に取り組み、片付けまで自分から率先して動くことを大切にしています。大会では、部員全員が西濃大会出場を目指して頑張っています。

女子ソフトテニス部



女子ソフトテニス部では「一所懸命」を部訓に、一球一球が強気で打ち込めるように練習しています。毎日、自分たちが考えたメニューで、前衛と後衛が互いに上達し合うことで、県大会出場を目標に頑張っています。

男子バスケットボール部



僕たちは、コートに対して感謝の気持ちを持ち、全員でプレーすることを大切にしています。練習前には整列をしてあいさつをすることで礼を示し、互いに声をかけ合って練習に取り組むことで、県大会出場を目指しています。

女子バスケットボール部



私たちは「声、諦めない、チームワーク」を合言葉に取り組んでいます。大きな声で自分からあいさつをすること、苦しくても全力でプレーすること、そして何でも言い合って高め合うことで西濃大会出場を目指しています。

ソフトボール部



ソフトボール部は県大会ベスト4を目指し、大垣市立東中学校との合同チームで活動しています。全員が声を出すこと、きびきびとけじめのある姿をつくり出すことを大切に、ソフトボールを楽しみながら頑張っています。

ハンドボール部



ハンドボール部では技術面だけでなく、礼儀やあいさつなどの面も大切にして活動をしています。日々の練習では、どの部よりも大きな声であいさつをして、仲間との関わりを大切にしています。県大会出場を目指して頑張っています。

美術部



美術部では、一人ひとりが自分の感性を生かして作品作りに励んでいます。色彩感覚を育てる塗り絵、刃先を生かしての切り絵制作、砂絵や油絵に挑戦している部員もいます。作品は校内に展示して鑑賞しています。

合唱部



合唱部では「Nコン本選出場」を目標に、ライバルでもある仲間と切磋琢磨しながら練習に励んでいます。また毎回の筋トレから精神面も鍛え、身も心も強くなっています。仲間と歌う喜びとともに目標達成を目指しています。

野球部



野球部では「その一球に全てをかける!」を部訓に、一球に全力で、全力疾走、全力で声を出すことを大切にしながら活動しています。部員は少ないですが、チームワークを高めながら日々練習に取り組んでいます。

サッカー部



サッカー部では「MOVING FOOTBALL～走って、走って、走り抜いて、感動を与えるサッカーをしよう!～」をスローガンに、技術力、人間力を高めるため、日常生活と練習に本気で取り組んでいます。

剣道部



剣道部では、現在女子部員3名で活動しています。中体連や新人戦で、チームで勝つことを目標に、日々稽古に励んでいます。また、剣道だけでなく「文武両道」をモットーに、どんなことにも精一杯取り組んでいきます。

バレーボール部



バレーボール部の部訓は「笑顔・元気・絶頂」です。日々の練習や試合の苦しい時、コートの中では「笑顔」を絶やさず「元気」にプレーをしようと、励まし合っています。チームが目指す「頂」点に向かって努力しています。

卓球部





卓球部では「礼儀と自主性」を大切に、あいさつと返事を大きな声で行うこと、集中して練習に取り組むことを全員でこだわって活動しています。出場した大会で、一つでも多くの試合ができるように頑張っています。

私たちのPTA



PTA家庭教育学級講演会



校舎（グラウンド北から撮影）



PTAあいさつ運動（1日目）



PTAあいさつ運動（2日目）



校舎と体育館
（体育館東から撮影）



校歌ダンスバージョン
録音風景



全国リズムダンス
ふれあいコンクール（昨年度）



PTA ふれあいダンス大会②



PTA ふれあいダンス大会①

学校紹介

関市立板取川中学校は、平成二十八年四月に洞戸中学校と板取中学校が統合してできた開校五年目の新しい学校です。校区は南北におよそ三十㎞。広い校区から五十四名の生徒が通学しています。

学校の教育目標は「個性を生かして 役立つ人に」です。小規模校のよさを生かし、一人ひとりの個性が生きる学校創りを推進しています。

PTA活動

令和二年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、総会は紙上開催となりました。総会後も、コロナ対策による自粛で実際の活動はなかなか進めることができず、本格的に活動を始めることができたのは二学期になってからでした。九月と十月の二カ月の間に実践した活動を紹介します。

PTA家庭教育学級講演会 九月十八日(金)

今年度初めての授業参観、学級懇談会に合わせて実施しました。本校スクールカウンセラーの馬渕 淳子先生を講師に「コロナ禍での親の在り方・接し方」をテーマにお話していただきました。コロナ禍で子どもたちがどんな不安を抱えているのか、その不安に対して親としてどのように接したらよいかを教えていただきました。

PTAあいさつ運動 十月十日(土)・二十四日(土)

地区の青少年育成協議会と合同で校門での朝のあいさつ運動を行いました。例年は平日に実施していましたが、今年度はコロナの影響で土曜授業が実施されることになったので、それに合わせて行いました。土曜日実施であったため、多くの役員が参加することができて、例年の倍以上の人数で子どもたちの様子を見届けることができました。マスク越しですが、目と目を合わせてしっかりあいさつできる子が多く、温かい気持ちになりました。

PTAふれあいダンス大会 十月二十四日(土)

本校は、開校二年目から四年連続でダンス大会の全国大会に出場するなど、リズムダンスに力を入れて取り組んでいます。子どもたちが取り組んでいるリズムダンスがどんなものか保護者にも体験してもらおうと、毎年ふれあいダンス大会を開催しています。

今年度は、本校の校歌を広く知ってもらう機会にしてはどうかとPTA役員より提案がありました。そこで、関市立田原小学校の大塚 宏之教諭に依頼し、校歌をダンスバージョンにアレンジしていただきました。でき上がったリズムに生徒の歌声をミキシングし、校歌ダンスバージョンが完成しました。ダンスの振り付けは本校のダンスを指導していただいている山﨑 明美先生にお願いしました。

大会当日は、多くの保護者や家族の皆さんに参加していただきました。一時間の中で山﨑先生のユーモアたっぷりの指導のもと、心地よい汗をかきながら、校歌に合わせた振り付けを一つ一つ覚えていきました。会の最後には、完成したダンスを全員で踊りました。親子で一緒になって一つのダンスを創り上げる楽しさを感じながら素敵な時間を過ごすことができました。



がんばる子らの 汗と笑顔と眼差しと

垂井町立表佐小学校



大縄大会

運動会は中止としましたが、学級の団結力や子どもたちの体力向上のため実施しました。子どもたちの歓声が校庭に響きました。



Webによる全校集会

コロナ禍において、全校が集まることが困難な状況です。インターネットを使って、式や集会を行っています。



ふるさとを学ぶ① 表佐太鼓踊り保存委員会

表佐の伝統である表佐太鼓を継承するために、地域の先生方に教えていただきます。総合的な学習でも取り組んでいます。



ふるさとを学ぶ② 校外学習

3年生の総合的な学習で地域のお寺に出かけ、表佐の歴史について学びました。ふるさとを知り、ふるさとを誇りに思う気持ちが生まれました。



福祉活動 アルミ缶回収

6年生が中心となってアルミ缶の回収を行い、垂井町の福祉施設に渡します。福祉について理解を深めています。



PTAあいさつ運動

1日の元気はあいさつから。学校とPTA、地域が一緒になってあいさつのできる子を目指しています。